

---

# ローズの恋愛

睦月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ローズの恋愛

### 【Nコード】

N2522U

### 【作者名】

睦月

### 【あらすじ】

ローズに溺愛の殿下。殿下に追い回されるローズ。ところが、隣国が攻め込んできた事でローズの知っていた頼りない殿下がローズの前でだけだった事を知る。今まで知らなかった殿下を知り全く知らない男の人の様に感じてしまうローズ。ローズの恋の行方は？  
2人の恋はどうなるの？

## 01 (前書き)

以前同じものを短編にて投稿しました。

なぜこんなことになってるの？

おかしい……。さっきまでは普通だったのに……。

「どおしてここにいるの！！リルガ殿下！！」

ここは私のオアシス。私の部屋でしょ！？

「……だって、ローズのベットってすごく寝心地がいいんだもん」

だもん。じゃない！！

「いやいや。殿下のお部屋のベットのほうが絶対寝心地いいと思いますよ？」

「え？じゃあ一緒に寝てくれる？」

「は？意味がわかりません」

「なあーんだ。一緒に寝てくるのかと思ったのに……。ぶう……。」

ぶう……。ってなんだ？仮にもこの大国の王子でしょ？

そんな綺麗な顔でかわいごぶったって許されることと許されないことがあるでしょ？

「それより、リルガ殿下？政務はどうされたんですか？まさか、ま

た投げ出して来たわけじゃないでしょうね?」

殿下の顔が引きつった笑みを浮かべた。

「……………投げ出してきたんですね?」

こつくりとうなづく。いやいや、もうすぐ25になるつと言つ人がそんな可愛い仕草をされても…………。

「はあ……………」

また、宰相様に小言をいわれちゃうな。

私は全く悪くないのに…………。

いつもいつもこの馬鹿殿下のせいで…………。

「…………ローズ?」

ああ…………。またそんな上目づかいでこつちを見て…………。

どこで覚えてくるんだ?そんな顔。

だけど、ここで負けてちゃまた宰相様に怒られてしまう。

ここは、女としても殿下に負けない上目づかいでお願いをきいてもらおう。

「殿下…………?私…………ちゃんとお仕事していただきたいのです。

していただけませんか…………?」

ここで効果音があつたら、絶対にきゆるーんって音だすのに…………。

「…………!すぐに仕事してくる!そしてすぐ戻ってくるから…………!」

おっ！私も女としていけるみたいね。

つて、なんか聞捨てならない事を最後に言わなかった？

戻ってくるって……？

い、いやあ！！！今度戻って来ちゃったら、私が完璧仕事に遅れちゃうじゃない！

ああ！ほら、馬鹿殿下に構ってたからもうこんな時間！

いそいで私も王宮に行かなくっちゃ！！！！！！！！

「ギリギリセーフ！！！」

はあ、はあ……。あのあとはもう死にもぐるいで走った走った。……もう死にそう……。

「おい。また遅刻か？」

むっ。この声は宰相様！

「違います！ほら！まだ、1分前です！」

「はあく。1分前は自慢できる時間じゃないぞ。毎回毎回言ってるが、時間に余裕をもって家をでろ。それで、遅刻とかありえないから」

「……ありえないって、若い子ぶっちゃって……」

あつ。やば。

宰相のこめかみに何か見える……。ひいひい。聞こえてたのか。さすが地獄耳……

「って、いたたたたたたた。宰相様！み、みみ！ちぎれる！  
！」

「ほおう。言うことはそれだけか？」

「ひいひい。ごめんなさい！ごめんなさい！うっかり口がすべっちゃったんです。もういいませんからあ」

「ふん。私はまだ27だ。年寄りあつかいするな！」

あゝ。痛かった。これってパワハラですよ。

しかも、7個離れてたら十分おっさんですよ。  
って、死んでも言えないけど……。

「さっさと仕事しろ。殿下は今日は一段と仕事に励んでおられると  
いうのに……」

はあ、と戻っていく宰相様。

それって、私がお願いしたからだし……。

遅刻しそうになるのも毎回毎回あの馬鹿殿下が邪魔するから！  
くう。宰相様は殿下びいきだからなあ。

言っても無駄どころか逆に怒られる。絶対にやる。あの男なら。

## 01 (後書き)

うっかり連載のつもりが短編になってしまったので再度UPしました。

まだ続く予定ですので、暖かい目で見守ってください。



朝から馬鹿殿下に邪魔され、いじわる宰相に引っ張られ、今日もついでない。

ああー！もう。本当にどうにかなんないかしら？

あの殿下さえおとなしくなってくれば、宰相に嫌がらせされる事もないし、仕事に集中できるのに……。  
何かいい方法ないかなあ……。

「ローズ！集中して仕事しろ！」

「はあ〜い」

ちっ。ご機嫌斜めだからって八つ当たりしないでよね。

これだから、宰相様は顔はよくてもモテないのよ。

まっ、知った事じゃないけど。

はあ〜、なんか今日の書類はやけに多いなあ……。

「宰相様あ。今日はなんでこんなに書類が多いんですかあ？」

「ちっ、今日はお前何の日か忘れたわけじゃないだろうな!？」

舌打ち!？舌打ちしましたよ？あの人……。

って、今日ってなんかあったっけ？

「……あれですよね?……あの……うーんと……ついた

あ!……!」

ペンが飛んできた！痛い！もうかなり痛い！！

「ドあほおが！！今日は殿下の誕生日だろうが！！」

「ああ！！そつかそつか。すっかり忘れてました」

だから、朝からあんなにうざかったのか。

「はあ・・・おかわいそうに殿下も・・・なんでこんな馬鹿を・・・

」

ん？宰相様何をぶつぶついつてるの？

なんか馬鹿とか言ってた？

え？殿下の誕生日を忘れてた事に呆れてるの？

だってえ、興味ないし・・・。

「はっ！お前、もしかして殿下におめでとつも言っていないのか？」

「はあ？そりゃ忘れてたんだから言う訳ないじゃないですか」

「はああああ。だから、あんなに機嫌が悪かったのか・・・」

何？殿下つたら、おめでとつを言っていないだけで機嫌が悪いの？

どんだけお子様なのよ？

「お前、今すぐ行って来い。他の仕事より最優先で行って来い！」

「え？何言っちゃってるんですか？そんなこと、この山の様な仕事をほっぽり出していく事じゃないですよ。また、お会いした時にで

も言っておきますよ」

「いや、今すぐ行け！じゃないと、その山がもう3つ位増える事になるぞ？」

「ええ！？意味がわかりません。いや、本当なんでそんな事になるんですか？」

「・・・今朝はよかった。何やらご機嫌で政務をこなされていたのに。朝、殿下におめでとうございます。と言ったら、殿下も忘れてたらしくてな、どんどん不機嫌になっていったんだよ」

「え？なんでですか？おめでとうって言われて不機嫌になるってどういう事ですか？」

「だから、とにかくお前が行け！行っておめでとうございますと言つて来い。なんならお前を差し上げる！」

スルーですか！？しかも、意味わからないし！！

「さっぱり納得できません！しかも、『差し上げる』って私は物じやありません！」

「つべこべ言わず行け！上司命令だ！」

卑怯だ！権力をこんな事で振りかざすなんて！！

「・・・わかりました。行ってきますよ」

はぁ・・・なんで、わざわざあの殿下に会いにいかなきやいけないのよ。

仕事も山積みなのに・・・。  
とにかく、さっさと帰って戻ってしまおう。

02 (後書き)

うっ……どんどん口が悪くなっていくローズ……。

ああ……。気が重い……。  
ただかお祝いを一言言いに行くだけで上司命令って。

とほとほと殿下の執務室に向かってしていると何やら、執務室の前が騒がしかった。

「殿下！開けて下さい！！」

ん？なんだなんだ？

野次馬根性丸出しで、殿下の執務室へ近づいて行ったら、公爵様や伯爵様・執務官に騎士団長までいるではないか！

「あ、あの、どうされたんですか？」

近くにいた公爵様らしき人に聞いてみた。

「ああ。殿下がボイコットしてるんだよ。何が気に入らないのか部屋に入れてくれず仕事が進まない」

はあ……。何をしてるんだ、あの殿下は。  
だけど、これで私も仕事に戻るって事だ。

しかし、その公爵様は恐ろしい言葉を発した。

「ローズとやらがいなければ仕事ができないとおっしゃるんだ。誕生日位自分の好きにしたいと。だから今そのローズとやらを呼びに行っているのだ」

「はあああ!?!」

思わず大声で叫んでしまった。  
すると、同時に扉が開いて元凶が出てきた。

「ローズ!!!!!!」

ああああ!やめてよ!

大声で呼ばないでよ!

こっちは来ないでよ!

皆見てるじゃん!!!

ほら、めっちゃみられてるしいいいいい。

「来るなあ!!!!!!」

思いつきり走って逃げた。

が、

騎士団長を始め周りの人々に捕まってしまった。

しかも、その目は明らかに「逃げんな!なんとかしろ!」

無言で言われるのが一番怖いつす。。。。

そして、差し出されました。殿下に。。。。

「ローズ!!!待ってたよ!」

ぎゅうっと抱きしめられて。。。いや、羽交い締めにされた。

「。。。。何してるんですか?殿下」

地を這うような私の声に殿下はそおと距離を取り始めた。

「……………ローズ？……………あの……………」

「またもや上目づかいか！？」

「ちっ、それも腹が立つ。」

「殿下。申し上げましたよね？仕事をしてくださいと。どうして今ボイコットなんてしてらっしゃるのですか？」

「しよぼん。としたって許せない。」

「こんな人目がたくさんある中で、羞恥プレイをした罪は重い。」

「……………だつて、ローズがおめでとうつて言ってくれてない……………んだもん……………」

「馬鹿か！？」

「こいつは本物の馬鹿だ！」

「おっと……………。思わず殿下にこいつなんて言っちゃった。テヘ。心の中だからいいか。」

「つて、そんな事より意味分かんないんですけど。」

「……………そんな事で皆様を困らせてるんですか？」

「鬼続行。」

「泣くかな？」

「ああ……………泣きそうな顔しちゃって。」

「つていうか、本当にこの人で次期国王大丈夫なの？」



「……わかりました。では、殿下が今ある仕事を全て終わらせたら、今日の夜バースデーパーティをしましょう」

そついうと殿下の顔はとたんにはあつと明るくなった。

「本当！？絶対約束だよ？じゃあ俺頑張るから！」

言うと同時に自分の執務室へ戻り机についた。

そこから殿下は「ほら、皆何してるんだ！早く書類を持ってこい！」と叫んでいた。

ふう、やれやれ。これでとりあえず一安心だ。

ローズも自分の執務室へと戻って行った。

2人のやり取りを見ていた周りの重臣達は、あまりのバカバカしさに呆れて石化していた。

03 (後書き)

バカップル・・・？

「くっくっくっ……」

いや、何だ？その笑いは……

「……ただいま戻りましたあゝ……」

「ああ。ご苦労」

え？何その何事もなかったような仕草。  
さっきまでめっちゃ笑ってたじゃん！

「……宰相様？何がおかしいんですか……」

「ぶはっ！！……お前……我慢してたのに……あーはっはっ！  
」

腹を抱えて笑いだしたよ……この人。

「くく……。殿下がボイコットとはね〜。そこまでとは思わなかった」

「ああ……。その事ですか……」

ちっ。せつかく嫌な気分に戻るのやだったから気分転換してきたのに、嫌なこと思い出させるんだから。

「馬鹿か。お前その後の殿下がどんなのか見てこなかったのか？」



さあ帰ろう。帰ろう。

カバン、カバンと……。

あれ？カバンがない？

「……お前ならそういっただろうと、さっき殿下が此処に来た時にカバンを持っていったぞ」

なにい！？

仕事だけでなくカバンまで持ってたのか！

ちっい。勘までするどくなってる。

「約束したんだろう？殿下とバースデーパーティー」

「……宰相様あ、私と「嫌だ」

最後まで言ってますが……

「いやあ！かわいい部下のお願い聞いて下さいよお！お願いですから、一緒に行きましょう！！！」

「あほ！俺がいったら殿下に殺されるだろーが！っーか宰相の立場も危ういわ！！」

「大丈夫！殿下なら許してくれます！なんなら、私が宰相を引き継ぎますから！！！」

「なおさら悪いわ！！！」

ぼかっとう頭を殴られた。

「ひ・・・ひどい・・・。可愛い部下の頭を殴るなんて・・・。いいもん、いいもん。私一人が殿下の餌食になれば宰相様はそれでいいんですよねえ・・・。」

イジイジ。

「それで、構わん」

ひどー！！！！

鬼め！！

## 04 (後書き)

話の内容が軽すぎますかねえ？  
でも、書いてて楽しんな話なので楽しいです

くそう。宰相様め！

ああ……。余計な事言うんじゃないか。帰りたいのに……。

ああ……。執務室が見えてきたよ……。めんどくさいなあ。

コンコン

「失礼します。リルガ殿下いらっしやいますか？」

……

ん？返事がない？

居ないのかな？

あれ？鍵がかかってないじゃん。

そおーっと中をのぞいてみると机の上で眠っている殿下を見つけた

「……しつれいしまーす……」

静かな声で部屋に入り殿下のそばに近づく。

どれどれ？

んー寝てるのかな？

おお。まつ毛ながっ！

こうやって静かにしてればかなりイケ面でタイプなのになあ……。性格がかなり残念だ……。



「・・・殿下あ？・・・」

起きる気配はない。

よし！今のうちにカバンを探し出して帰ろう！  
カバンカバンっと。

うろつろと執務室の中を探し始めた。  
すると、後ろからにゅっと腕が伸びてきて拘束された。

「ぎゃあー！！」

振り向くと少し怒ったような殿下の顔が近くにあった。

「・・・ローズ、何してるのかなあ？」

「で・・・殿下・・・。寝ていらっしやっただけは・・・」

冷や汗がだらりと垂れる。

「少しうたた寝してただけだよ。それで、今何してたの？ローズ？」

な、なんか、その笑顔怖いんですけどお・・・。

「え、えつとお。カバンがなかったので探してみました・・・？」

「大丈夫だよ。カバンは俺が持っているから」

いや、返して下さいよ・・・。

って言える雰囲気じゃない？

「・・・ローズ。帰ろうとしてたよね？」

さらに笑顔がかわいい・・・。

「いえ！そんな！」

「してたよね？」

殿下の笑顔が正直に答えるや！って書いてあるように見えますが・・・。

「・・・はい。しました」

「約束してたのに？」

「・・・だって、何も用意してないですし、私一人じゃさみしいでしょうから」

そう！そうだよ！

我ながらナイス言い訳！！

「問題ないよ？食事なら私室に用意させてるし、誰かいたらむしろ邪魔だし」

即答ですか。しかも邪魔って・・・。

ん？食事？私室？

「で、でんか？まさかとは思つのですが、殿下の私室で食事をしようだなんてお考えじゃありません・・・よね？」

「そつだよ?。」

のおおおおおお!!

馬鹿殿下到来だ!

一般ピーポーの私が殿下の私室なんてありえないから!!

「で、殿下!! 私はその様な私室になんてお邪魔できませんからね!  
!お立場考えて下さいよ!?。」

「立場?別に問題ないんじゃない?。」

いやいやいやいや!

問題大アリだから!

「いいえ!殿下の私室に入るのはお妃様だけと決まっているではありませんか!!」

「だって、俺に妃はいないから問題ないじゃない」

「だから!!妃になる人しか入ってはいけないんですよ!!」

「じゃあ、ローズが妃になればいいじゃない。っていうか、ローズ  
しかありえないし」

は?

今なんていいました?このひと。

とんでもないことさうつと言いませんでしたか?

## 05 (後書き)

妃ってもうプロポーズですよね？

勢いでプロポーズしちゃってますよ。殿下……。

「殿下？そんなこと軽々しく口に出してはダメですよ？私だったからよかったものの。他の人なら本気にとっちゃいますからね」

あやうく本気にとりそうだったわ。

殿下が怖かったからね。

ビビってたから思考が思わず変な方向に行ってたんだわ。

あぶないあぶない。

「……ここまでいっても駄目なのか……。なんかもう、ローズってすごいよね……」

ぼそぼそと何を呟いてるんだ？殿下。

冗談が通じたからほっとしてるのかな？

そうだよねえ。

だってそうじゃなきゃ、殿下の立場的にあぶないもんね！

「では殿下、カバンを返して下さい」

「……ローズ？」

「いやいや、ちゃんとバースデーパーティはやりませう？でも、家でやりませう」

そうそう。家に帰って適当にお祝いすれば殿下も気がすむだろう。じゃないとまた私室へ……

みたいな冗談か本気かわからないような事いいたすんだから。

「・・・ローズの家？それもいいね。じゃあ用意をするから待って」  
すっかり機嫌がよくなった殿下が着替えに執務室横にある休憩室に入った。

ああ・・・でも食事を用意してくれてたのかな？  
それ、もって帰っちゃダメかなー？  
家に帰っても何も無いしな。

「殿下ー！お食事をつつんで家に持って帰ったりできませんか？」  
休憩室に向かって叫んだ。  
するとすぐに殿下が出てきた。

はやー！！  
着替えるの早すぎですよ！

「そんなことしなくても、新しい料理をローズの家に運ばせよう」  
「いやいや。もったいないじゃないですか。せっかく用意して下さい  
つたんですからそちらを持って帰りましょうよ」

「イイ子だなあ。ローズは。でも、心配しなくていいよ。食べなかったものはちゃんと他の者が食べるから」

極上のとろけるような笑顔で私の頭をなでた。

「そーなんですか？なら、私ローストチキンが食べたいんですけど・・・」

笑顔の効果はローズには無意味だった。

ふふふ。殿下が食べるような食事なんてめったに食べれないから楽しみだわ。

あんなものやこんなもの……。じゆる……。

たまには殿下と食事もイイカモネ！

「ローズ……。思考が顔からダダ洩れだよ？しかも、最後なんてカタカナ？でも、たまに食事してくれるならいいけどね」

……。おかしいな。

口にはだしてなかったのに……。

ていうか、発言も人の思考を読むのも怖いわ！！

「だから、顔に書いてあるんだってば！それより早くローズの家へ帰ろう」

「読まないでください！！そんでもって、帰るって間違ってるから！！！！」

殿下に引きずられるように自分の家へ向かった……。

……。自分の家に帰りたくないってどうなの？  
ああ！そういえば殿下の誕生日だった。

「……。殿下！お誕生日おめでとunggozaimasu」

服の首あたりを持って私を引きずっていた殿下は急に手を離れたもんだから、尻もちをついた。

「いたっ！！殿下！只でさえ扱いが雑なのに急に手を離さないでくださいよ！！！」

つてなに！？

そのまじめな顔は。

どうしてそんな真面目な顔でこっちみてるのよ！

と、思ったら急に背を向けられた。

なんなんだ？一体・・・？

首をひねりながら、とにかく痛いお尻をさすっていた。

今、殿下は思わぬところでもらったローズからの言葉に顔を真っ赤にして本気で喜んでいたことも知らず・・・

「~~~~~っ！！本当に！！人の気も知らないで！！ほら、ローズさっさとお家に帰ろっ！！！」



06 (後書き)

ローズどんどん殿下への言葉づかいが崩れてきてるう・・・

「ふふふ……。殿下、お誕生日おめでとございます……。殿下のお誕生日を2人で祝えてうれしいですわ」

「ありがとう。私もローズと2人で祝えてとても嬉しいよ」

お互い見つめあいながらグラスをかざし乾杯をした。

……。なんて事はあるわけがない。実際は……

「殿下！これ！これすごく美味しいです！はあああ！ほっぺが落ちそう！夢にまで見たローストチキンは夢以上だわあ！！」

ローストチキンごときに興奮するローズ。

……。可愛いんだけどね。すごく。チキンでなくローズを食べちゃいたくなるくらい。

「ローズ、落ち着いて食べないと喉に詰まらせちゃうよ?」

それでも、ローズと過ごせるのが嬉しい殿下である。

「でんくわ?でんくわはおひよくひしゃれないんでひよかあ?」

両頬にいっぱい詰め込んでまるでハムスターの様だ。

「ふふ。食事してるよ。ローズの笑顔でお腹いっぱいだ」

・・・どん引きだ。

何を言ってるんだ。

あまり食べてないようだから気を使ったのに。  
ごっくんと口の中にあっただものを飲み込んだ。

「殿下。お疲れですか?今日はものすごく仕事されたようですよ  
んね?」

「んー、疲れてないって言ったらウソになるけど、ローズと一緒に  
いるだけで癒されるから大丈夫だよ」

おいおい・・・。

今日はいつもの増してゲロ甘な言葉を発してるあたり、かなりお疲  
れの様子ですが・・・?

「お食事も喉を通らない、あまりのくだらないこと・・・いや、ゲ  
ロ甘・・・甘いお言葉を発してるあたり大丈夫のように見えないの

ですが？」

「・・・ローズ、たまに俺だって傷つくんだよ？誕生日くらい優しくしてくれたっていいのに・・・」

・・・一国の王太子とは思えないお言葉だな。

「なら、城に戻って早く休まれた方がよろしいですよ？疲れを取るには休息が一番です！」

そうそう。早くお家に帰って寝なさい！

「・・・大丈夫だよ。今日は一緒にいるって約束したから頑張ったんだからね？」

ジロリと睨まれてしまった。

まあ・・・確かに今日は私の仕事なくなるくらい頑張ってもらいましたが・・・。

大分顔色が悪いんだよなあ・・・。  
帰れって言っても帰らないし・・・仕方ないな。

ローズは席を立ちベットの前に移動した。

「・・・殿下？一緒にいればいいんですね？」

「??？」

殿下は首をかしげた。

「はい！じゃあ此処で寝て下さい！私のベットは寝心地がいいんでしよう！？」

「！！！！ええ！いいの？いや！っていかそうしたらローズの寝るところがないじゃない！」

がたんと、椅子が倒れる勢いで席を立った。

「いいんです。私は床にでも寝ますから！早くこっちで横になってください！」

「いやいや！ローズを床に寝かせるなんてできないよ！！俺は大丈夫だから食事の続きをしよう？」

にっこり笑って、また席についた。

むー。どうあっても寝ないらしい。

なら、最終手段だ。

「・・・殿下？今なら膝枕のサービスをして差し上げますよ？」

「！！！！！！！」

ふふ。予想通りすつ飛んできた。

まったく、なんで膝枕なら寝れるんだ？

しかも、膝枕って長時間すると足しびれちゃうから嫌いなんだよね。だからって寝かせずに疲れたままにして、明日の仕事に影響がでてもこまるし。

今日みたいな事にでもなったら殿下を絞殺しかねないもん。

「殿下？ちゃんと寝て下さいね」

にっこり笑って、私の膝の上にいる殿下の頭をなでた。

「はあく。こつという事平気で出来るあたりまだまだなのかなあ・・・

」

ぼつりと殿下は何かをつぶやいたがそのまま目を閉じた。

ん？何か言った？

まあ、いいや。

とにかく早く寝ろ。

殿下が寝たら殿下のローストチキン頂いちゃおう。

膝枕したんだから、それくらいイイよね。うふふふ。

そう思っていたら、下からスースーという寝息が聞こえてきたのだ  
った。

07 (後書き)

殿下・・・憐れですね・・・。

でも誕生日だったので少しいい思いをさせてあげました(笑)

「…ん…ふぁぁぁ…」

あゝ。今日も仕事かぁゝ。

今何時だろ。

時計、時計…

ムニムニ。

ムニムニ？

時計ってこんなに柔らかかったっけ？

「ふふ。そんなに強く握られたら痛いな」

んんん！？

私は、文字通りガバツつと起き上がった。

「で、で、でんかぁゝゝゝ！！！？」

「おはよう、ローズ」

「な、なんで、殿下がいるんですかー！」

もしや、また朝から政務を放り出してきたんじゃ…

「何言ってるの？昨日はローズが寝ろって言って無理やり寝かしかけたんでしょ？覚えてないの？」



「……あぁ！」

そうだった、そうだった。

昨日は、殿下の誕生日パーティーをやつて、あまりに疲れてたっ  
ぽいから寝ろつて言っただけ？

「……だからって朝までいる事無いのに……。  
近衛達は何をやつてるんだか、さつさと連れて帰ればいいのに。」

「ローズ？百面相して何考えてるの？」

「何つて、そりゃ……」

「あぁ！ーやつぱり言わなくていいよ。……なんとなくわかるか  
ら」

「……左様でございますか」

だったら、さつさと帰ればいいのに。

「さぁ！ローズ。そんなことより朝ごはんにしよう！用意しておい  
たよ！」

テーブルに並ぶのは朝から豪華な朝食だ。

「……朝からこんなに食べれませんよ……。  
大体、用意してるつてことは誰か来たつて事だよね？  
その時に連れて帰ればいいのに……。」

「ほら！早く食べよう！」

にこにこした顔で私を呼ぶ。

・・・なんか、憎たらしい・・・。

「・・・こんなに食べてたら豚になりますよ。殿下」

「ええ！？豚？豚になった俺は嫌い！？」

いや、好き嫌いとかホントどうでもいいから。

嫌味も通じないとはまったくめんどくさい・・・。

「殿下が豚になるとどうでもいいです」

そういうと、目の前で騒いでいる殿下を放置して、パンとコーヒーだけ頂いた。

\*\*\*\*\*

朝食を食べ終わると、先程より頭がすっきりしてきた。

「殿下！ほら、早くしないと私が仕事に遅れてしまいます！急いでください！」

「俺は大丈夫だもん。なんならローズの家で留守番してるよ？」

「いやいや！迷惑ですから！！っていうか、殿下もご政務があるでしょう！仕事してください仕事！！」

「えー。昨日やったから今日はあんまり仕事ないと思うけど・・・」

「だったら、この国の事について考えて下さい！とにかく何でもい  
いから行きますよ！！」

じゃないと、また宰相様に怒られてしまう！！

もう本当に朝からあの人の嫌味は聞きたくない！！

一日気分がブルーになるんだから！

「じゃあ、馬車で行こう。表に呼ぶから」

なに！？馬車とな？

あー、それなら結構余裕で着くかもお……………。

でも、殿下と一緒に出勤とかありえないし……………。

「いや、やっぱり歩いていきますよ」

殿下も一応王子だし、一緒に出勤とかまずい気がする……………。

「……………今から歩けば遅刻だよ？馬車で行けば間に合っけど？」

はうあ！！！！いつの間にこんな時間！？

くううう！遅刻はいやだ！でも……………

「……………宰相のお説教なくなるよ？」

「……………」一緒に一緒にさせてください」

負けた……………。

あの宰相様の説教程嫌なものはない……………。

そして、殿下はご機嫌、私はししぶしぶ馬車に乗って出勤する事になった。

08 (後書き)

朝から豪華な食事・・・。

寝起きでは食べれないでしょうが、とってもうらやましい。

何がうらやましいって、ご飯ができている事がうらやましいです。。。

なんて、思っている作者でした。

次回もよろしくお願いします。

## 09 (前書き)

お気に入り登録100件!!

登録して下さった皆様ありがとうございます!!

皆さまの応援を糧に頑張っていきます!!

「…いたたまれない…」

やっぱり乗るんじゃないかな！

何かしら？この出迎えは！？

はああああ。出るに出不るいいい！

「どうしたの？ローズ。早く下りないと遅刻しちゃっよ？」

ちっ。これが普通の殿下にはわかんないのよ！

この庶民の気持ちか！！

「…殿下。先に下りて下さい。私は後から行きますから」

とっと下りてもらってこの集団がいなくなったら私も下りよう。

「何言ってるの？一緒に下りればいいじゃない。ほらいくよ」

手をひっぱられながら殿下に下ろされた。

ひひひひひひひ！

視線が痛い！

なんで殿下と一緒に乗ってんだよ！

って視線があ！！

はう！宰相様まで出迎えてんのか！

あの、呆れた顔。

口があんぐり開いてますよ。

「・・・殿下。わざわざそんなどぶ猫を送り届けて下さってありがとうございます」

ぎゃあ！宰相様！！

つーかどぶ猫ってひどくない・・・？

首！首根っこ掴まれてます！！

「宰相。ローズをどぶ猫呼ばわりしないで。ローズはちょっとした我がまま猫さんなだけだよ」

ふふふって、笑っても結局は猫なんじゃないか！！

私は猫じゃありません！！

「・・・殿下、本日はご機嫌のようですね。何かいいことでもありましたか？」

「そうなんだよ！宰相、きいてくれる？ローズがね自分から膝枕してくれたんだ！！」

ぎゃああああああああ！！

何言ってるんだ、この馬鹿殿下！！

羞恥プレイ続行か！！？

みてよ！周りの視線と顔を！

口が開いてますよ！

あああ、宰相がこっちを楽しそうにみてるじゃないですか！

「ほお。ローズが自分からですか。それはようございましたね。それでは、このどぶ猫は私の方で仕事をさせますので、これで失礼します」



「うん。頼んだよ。じゃあローズ。またあとでね」

殿下は周りの集団を引き連れ城に戻っていった。

・・・

馬鹿殿下め。

次会った時は絞め殺してやる。

「・・・そんなことしたら、お前は死刑確定だな」

「読まないでくださいよ・・・人の心を」

「わかりやすいんだよ。お前は・・・まったく殿下と一緒に出勤とはいいいご身分だな。さっさと仕事しろ。今日は罰として殿下専用書類の担当だ」

「はああ！？なんでですか？遅刻してないじゃないですか！！」

「ばかか。殿下と一緒に出勤してくる方がなお悪いわ！立場を考慮！！」

・・・ですよね？

やっぱりそれはまずいよね。

はあ、殿下専用書類ってかなり種類が多くて大変なのに・・・  
くそう、馬鹿殿下め恨んでやる。

「ローズ！ローズってば」

耳障りな声が聞こえてくるが、気のせいだろう。

「ローズ……。ごめんってば。許してよぉ……。」

そう、馬鹿殿下が先程から私の後をついて来ては謝っている。

「もう人前でローズの嫌がる事しないから」

「……。当たり前です。迷惑なんですよ」

「ローズ！やっと口聞いてくれた！」

しまった！！

うっかり口に出してしまった。

「ローズ！お詫びになんでもするから！そうだ！今日の夕飯にローストチキンを用意するよ！」

はぁ……。

無視してもずっと付いてくるし、めんどくさいからガツンといって終わらせるか。

「ローストチキンは昨日食べたのでもう結構です。そのかわり殿下1週間私に近づかないで、ちゃんと仕事してください。そうしたら許してあげます」

「ええ!!!1週間もローズに近づかないなんて無理だよ!!!」

「じゃあ、今後一切口聞きません!」

「うう……。そんな……」

泣きそうな顔がまるで捨てられた子犬の様だ。

「……わかったよ。1週間我慢するよ……」

「仕事もちゃんとするんですよ?わかりました?」

「わかったよ……。じゃあ、それで許してね」

「もちろんです。では今からさっさと執務室に戻って仕事してください」

「ええ!?今からのの?」

「そうですよ。嫌なんですか?」

じろりと睨んでやった。

「……執務室に戻るよ。じゃあ、ローズ元気だね!絶対浮気なんてしちゃダメだよ!!!」

浮気も何も殿下の妃でも彼女でもないんですけど……?

「……はいはい。さっさと行ってください」

そして、私の仕事を減らしてください。

「……じゃあね！1週間の我慢だよ！！」

そういつと泣きながら走って執務室に戻って行った。

「……女ですか……」

どちらが女かわかったもんじゃない。

しかし、これで1週間は静かに過ごせる。

そう思うと、頬は緩み思わずニヤけてしまう。

「ふふふ……。つといけないいけない。さあ、仕事にもどろっ！」

明日からは宰相様に嫌味を言われなくて済む。

そう考えていたら、知らぬ間にスキップをしていた。

「……おい。お前はどこの子供だ……」

「！！宰相様！なんですか？いきなり」

おお……。びつくりした。いきなり現われないでほしいよ。いつもいつも。

つて、あれ？いつの間にか自分の執務室に戻ってきてたよ。

「何かいい事でもあったのか？というか、廊下をスキップして歩くな！」

「スキップって何言ってるんですか？そんな子供みたいな事するわ

けないじゃないですか!」

「.....」

あれ?何頭抱えてるんだ?

まっ、今日の私はごきげんだから、宰相様のおかなしな行動も目を瞑ってあげよう。

さあ!仕事をすませてゆっくり家でのおんびりするぞぉ!..!

10 (後書き)

1週間なんて普通ですよ。

でも、殿下にとったら1年以上の様に長いんですよ。

だって、毎日のようにローズに付きまどってるとるんだから……。

「ふあゝ!!」

すばらしい朝だ!

こんな清々しい朝は久しぶりだ!

「誰にも起こされないのって素敵!!」

いつもならここで必ず殿下がとぼけたことを叫んでいるだろう。

それなのに、今日は優雅にコーヒーを飲みながら朝ごはんを食べ、  
ゆっくりと顔を洗い仕事へ行く準備をする。

遅刻するゝ!!!

と叫ぶ必要もない朝だ。

「うん。そろそろ出ようかな」

余裕をもって家を出る。

くゝ。

これぞまさに理想!!

「ふふふ。今日は宰相様に怒られる心配もないわ」

思わずスキップをしたくなる。

「おっと。。。どこの餓鬼だとまた言われてしまっわ」

いつもより早くついた仕事場。

「およ？宰相様の姿が見えないがまだご出勤されていないのかな？」  
むふふふ。

宰相様より早く着いちゃった。  
宰相様驚くかも。

「……おまえ……こんなところで何してるんだ!？」

聞き覚えのある声が後ろから聞こえた。

「宰相様!ふふ。何してるって早く来たんです!!今日は遅刻なんてありえないでしょう?」

吃驚してる。吃驚してる。

ふふ。目が飛び出しそうだわ。

「違う!!なんでまだこんな所にいるんだ?殿下の見送りに行かなかったのか!!」

え?見送り?

……ああ?昨日のやつかな?

いちいち子供じゃないんだから、あんな大勢で出迎えなくてもいいのに……

「宰相様が行けばいいじゃないですかあ。いちいち王宮に来るたび殿下を出迎えるなんてめんどくさい……」

あれ?でも殿下って王宮で暮らしてるし出迎える必要はくない?

「……っつ。この阿呆が!!今日は殿下が出立される日だろう?」



「……もしかして、聞いてないのか？」

「へ？出立？どこか行かれるんですか？殿下が？」

「……お前、本当に聞いてないのか……。はあ……。殿下もなぜこんな大事な事をこいつに云わずにいかれたのだ？」

ひどく真剣な顔で溜息をつく宰相様。

何か私の知らないところで起こっているらしい。

「あのお……。殿下がどうかされたんですか？」

「……。兼ねてより我が国の最北端で内紛が起こっていたのは知っているか？」

「はい。もちろんです。以前から問題になっていた土地ですよね？それが何か？」

「……嫌な予感がする。」

「そこに、隣国のフィナル国が先日攻めてきた。内紛の起こっている所に隣国が攻めてきたんだ。被害は尋常じゃないくらいお前でもわかるだろう？」

「……はい」

ただでさえ、内紛のせいで町は荒れ、人々は貧困に陥っていた。そんな中、隣国が攻めてきたとなれば、戦うすべなどないに等しい。赤子の手を捻るよりも簡単に町は廃墟と化するだろう。

「・・・まさか・・・」

「・・・そうだ。殿下は騎士を引き連れそこに向かったのだ」

## 11 (後書き)

・ちょっとシリアスな感じになってきました。

そんな!!昨日は何も言っていなかった!!  
いつも通りふざけてて、何一つそんなそぶりは見せなかった!!

「・・・おまえに心配させまいと何も言われなかったのだろう」

宰相は目を瞑り顔をそむけた。

「そんな!!どうして!!・・・」

もしかして、近づくなと言ったから?でも、そんなつもりで言ったわけじゃなかった。

「それに、今回はまだ戦う訳ではない。その街で生き残っているものの救出へと向かわれたのだ。今こちらでは隣国に対して使者を送っている。その間、戦が始まる事はない」

「・・・でも!!そんな補償どこにあるんですか!もし、隣国が攻めてきたら?どうして殿下自らが行かなければならないのですか!」

「少し落ち着け。何も殿下は死に行ったわけじゃない。苦しんでいるものを救いに行かれたのだ」

宰相様に言われてハツとする。

そうだ・・・。

別に殿下は戦いに行ったわけではない。

なのに、なぜこんなにも乱してしまったんだろう。

「……すみません。取り乱してしまいました」

頭を下げ宰相様に謝罪する。

いつもと違う状況だったからだ。

そしてそれに浮かれてしまっていた自分が情けなく思えてきた。

「それで……、殿下はいつお戻りになるのですか？」

「……大丈夫か？ローズ。お前らしくないな。殿下がいなくてさみしいのか？」

くつと笑う宰相様の顔を見るといつもの意地の悪い顔をしていた。

「……寂しい？」

「……なんで私が殿下がいなくてさみしがらなきゃいけないの？違う。」

昨日あんな事言っただけで、口もきかずに何かあったらと思ったから。

「そうよ！」

あんな喧嘩した後そんな話を聞いてちよつと動揺しただけよ！

大丈夫！宰相様だっておっしゃったじゃない。

ただ負傷したものを救いに行っただけだって。

「……寂しいわけありません！ただ、何も言っただけで下さらなかった事に腹を立てただけです！」

「そうだ！」

あれだけ時間があつたのに、どうして何も言ってくれなかったの？  
そうしたら、こんなに心配することだつてなかったのに！！

「そうか？心配のあまり泣くんじやないかと思ったぞ？」

またもや、にやりと悪そうな顔で私を見降ろしてきた。

「泣くわけじゃないですか！！戻ってこられたら、しっかりと  
お説教させていただきます！！」

なぜ、何も言ってくれなかったのか……と。

「……まあ、殿下はあ見えても騎士をまとめ上げる団長も兼  
ねている。それはお前も知っているだろう？殿下が率先して行くの  
は当然の事だ。しかも、今回はまったくの不意打ちだ。対策を打つ  
ことも出来ずあの土地の者を守ることができなかった。殿下は少し  
でもはやく救出に向かいたかつたのだろう」

宰相様はいつも通り席につき仕事を始めた。

「しかし……。なぜ、今になって隣国は攻めてきたのでしょうか  
？あの土地の内紛はもう2年になります。その間攻めるそぶりなど  
全くありませんでした」

こう見えてもローズも宰相の補佐官だ。  
ある程度の国の情勢は知っていた。

「……それには、私も引つ掛かっていたところだ。とにかく、  
現在の状況を調べるしかないだろう。ローズ、隣国への間者をここ  
に呼べ」

いつもの雰囲気とは全く違う執務室にローズは緊張を走らせ宰相様の言葉に頷いた。

王宮を出て、人目につかないところに来た。

「リユー」

はっきり聞こえる声で呼んだ。

「はっ！ここに」

「ご苦労様。悪いんだけど、隣国の様子を見に行っているジクを呼んでちょうだい。今晚までに宰相様の執務室に来なさいと」

ホントはこんなことがないように祈っていた。

彼らはいざという時には間者となる。

それ以外は普通の情報諜報をするだけなのに。

「ローズ様……。お顔色が優れない様ですが……。？」

「……。ええ。あなたはもう知っているでしょう？」

「……。殿下の事にございますか？」

「そう。私は今朝殿下が出立されてから知ったわ。もっと早くに教えて下されば何か役に立つ事が出来たのに……」

悔しい……。

平和ボケしていたのかも知れない。



「お気を落とされず……。まだ我々は出来る事があります」

「ええ。そうですね。では、ジクをお願い」

そういうと、リユーは姿を消した。

ふう……。。

悔しがってる暇はないわ。

今私が出来る事をしなければ！！

\*\*\*\*\*

「宰相様！こちらの状況はわかりましたか？」

流れるように普通の書類を裁きながら処理していく。

「……うむ。どうやら、けが人や死傷者はあまり出ていないようだ。しかし町の状況はひどいらしい。家は焼き払われ辺りは焼け野原だそうだ」

焼け野原……。。

ひどい。

なんの罪もない人たちが巻き込むような事をして！

絶対に許さない！！

「ローズ。あまり感情的になるなよ？隣国の狙いはまだわかっていない」

狙い……。

本当に何が狙いなのかしら？

「……わかっていません。……しかし、なぜ……」

今まで、隣国との関係は良好だった。

それがなぜ急にこんな事になったのだろう……。

「………宰相様……」

ふと、入口から気配がした。

「ああ……」

「……ジク！入ってきなさい」

入り口に向かって声をかけた。

「………遅くなり申し訳ございません」

「ジク！！どうしたの？その怪我は！！」

右腕から大量に血が流れていた。

「……すみません。こちらに戻る途中、隣国の者に見つかってしまい矢を受けました。しかし、かすり傷です。問題ありません」

右腕から流れる血が痛々しかった。

「……それで、あちらでは今何が起こっている？」

宰相様がジクを見据えて問いかけた。

「はっ。それが、2日前国王が変わりました。するとまもなく、こちらへの攻撃を始めたのです！あまりにも唐突すぎて情報をつかむのが遅くなってしまいました。申し訳ありません」

国王が変わった……？

おかしい。あそこの国王はまだ30代後半だったはずだ。

王子もまだ幼く跡を継ぐものがまだ育ってないはず……。

「……国王が変わるとはどういう事だ」

宰相様も異変に気付いたのだろう。  
険しい顔をしてジクを問い詰めた。

「それが、前国王の兄の息子……、つまり前国王の甥が国王一家の惨殺後自分がその席に着いてしまったのです！！」

惨殺……。

なんてひどい……。

「でも、周りの者はどうしたの！？宰相殿は？」

王家一家を惨殺しても議会の者からの承認がなければ正式な後継者じゃないかぎり跡はつげないはずだ。

「それが……、議会の半分は現国王のお味方しており、残りの者は近いものを人質にとられ反論の余地をなくされたようです」

なんて事だ!!

そんなに現国王の力が浸透していたなんて!!

「……それで、なぜこちらを狙う?」

冷静に宰相様は先を促した。

「……それが、目的がさっぱりわからないのです」

宰相はさらに深く眉間にしわを刻んだ。

「どつという意味だ？」

「調べても調べてもこちらを狙って隣国にとって利益を生む事はありません。侵略かと思えばそうでもございません。何かこちらに恨みでもあるのかと思って調べたのですが、特に現国王はそういう事もないようです」

「ならばなぜ攻撃を仕掛けてきたのだ……」

宰相様は顎に手を当て考え込んでしまった。

思い当たる理由がない……。

では、あちらで何か秘密裏に行われてる事があるのだろうか？

しかし、その情報がかけらもないというのはおかしな話だ。

まさか、殿下をおびき出す為では……!?

「宰相様！もしやとは思いますが殿下をおびき出す為に……」

「それはないぞ、ローズ。殿下に会いたいのであればあちらはすぐに会える。殿下を人質にとつたとしてもこちらが脅しに屈する事はない」

「そうだ……。殿下の命が狙われた場合、国に危険が及んではいけないため、助けるどころか捨て置かれてしまう……」

それもひどい話なのだけど……。

「……では、なぜでしょう?」

「わからん。何を考えているのやら……。しかし、情報があつめられないとは困った。ジク、引き続き情報を頼む。……怪我の手当てはしておけよ」

「はい。了解しました」

ジクは返事をするとともに姿を消した。

「……ローズ。とにかく、殿下が帰られた時の用意をしておけ。負傷者が多数いるだろう」

「はい……。手配しておきます」

負傷者……。

一体どれくらいの人が怪我をしたのだろう……。これだから、戦争って大嫌い！人を傷つけてまで獲るものの何がいいのかわからないわ!!

「はぁ……」

「お前が気を落とすな。これから王宮に来る者たちはもっと辛い思いをしているんだ。我々がしっかりしないでどうする」

「……こういう時は本当に頼りになる。

宰相と言っただけあるよね……。

普段、あんなに鬼のようだけど……。

「そうですね！では、私も手伝いに行つてきます！！」

\*\*\*\*\*

殿下が戻られたのはそれから3日後だった。

「こつちの者を先に手当てしろ！！」

「大丈夫。傷は浅い。気をしっかり持つのだ」

・・・殿下はいつもの殿下とは思えない。

「ローズ！ポケっとしてる暇があるならそちらの者の手当てをしる  
！」

「はっはい！！」

今までこんな殿下は見たことがない・・・。

そりゃ、これだけのけが人がでて冷静でいると言う方が難しいよ。  
でも、殿下はいつもどおりほわーんとしてるんだと思った。

殿下が殿下に見える・・・。

「ありがとうございます・・・」

ふと気付くと目の前にいる男が口を開いた。

「い、いえ！！お礼を言われる事ではありません。私たちが貴方達

を守るのが遅れてしまったのですから……」

もっと早くつかめていたら……

「いえ。それでも、殿下をはじめ騎士の方々は必死に私たちを助けて下さいました。更には危険だからと生き残った村人全員を王宮に連れて来てくれたのですから」

そうだったのか……。

どつりで人が人でない人も見かけるとおもった。

「そうだったのですね。こちらは安全です。しっかり傷を癒して下さい」

「はい。ありがとうございます」

にっこり笑ってローズは殿下のもとへ走った。



「殿下!!」

執務室へ戻る殿下を見つけるとローズは声をかけた。

「……ローズ……」

こんな殿下は見た事がない……。とても悲しい顔をしている顔なんて。

「……殿下。大丈夫ですか？ 顔色が優れませんが……」

「ああ。大丈夫だ。……ひどい有様だった」

「……殿下……」

「内紛を止めようとして散々議題にあげてきた。でも、ここでいくら討論しても無駄だったんだ！ 現地に行って良く話をきくべきだった！ そうしたら、隣国が攻めてくることもなかった!!」

殿下は頭を抱え込んだ。

そつと殿下に近づき殿下の手をとった。

「違います。殿下。殿下はあの地の者達にとって最も良い方法を探しておいででした。そこに目をつけて襲ってきた隣国が悪いのです！」

こんなに弱った殿下は初めてだ……。

いつもの殿下の面影など微塵もない。

「……ローズ。私は、今まで何をしてきたんだろうな……」

「……殿下……」

「いざという時の為に腕も磨いてきた。何か起こっても対処できる  
よう勉強にも励んだ。……しかし結局この有様だ。俺は何も出来  
なかった……」

……殿下はぼつりぼつりと言葉をこぼした。

それが本当に心からの叫びの様に……

「殿下。……こう急に攻めて来られたら打つ手がなくても誰も責  
めません。報告があつてすぐに殿下ご自身で駆け付けられ、その地  
の者を救つて来られたではないですか！」

「……しかし、救えなかった者も大勢いる……」

……今の殿下は救えなかった事をとて後悔している。  
でも、殿下が助け出したものも大勢いるのに……  
……殿下がこのままではいけない！

「殿下……！」

突然の大声に殿下は顔を上げた。

「いつまでくよくよされるおつもりですか!!あなたはこの国の王となられるお方ですよ?あなたがくよくよしては下に示しがつきません!!!」

しっかりして下さい!

今ここでなよなよになってどうするんですか!

「……ローズ、そんなことを言っても俺は何もできないんだ……」

言葉が届かない……。

殿下の悲しみは深いところにまで巣食っている。

「殿下の良いところはすぐに立ち直ってしつこいくらい食いついてくるところじゃないんですか?」

「……ふ……。それとこれとは違うだろう。これは人の命の問題なんだ」

「それでも、殿下の持ち前のしつこさと明るさでしなればならぬいことがあるでしょう?」

「……一体俺に何をしろと言っただ?……俺は自分の国の者も救えないんだぞ!!」

殿下は苛立っていた。

自分が何もできないと思って。

救えなかった人達の事を思って。

でも……。

「……殿下。救えなかった者を思う気持ちも痛い程よくわかります。しかし、あなたの国の人間は救えなかった者達だけが全てなのでですか？それでは今王宮にいる者達は守らなくてもよろしいのですか！？これから傷ついてしまつかもしれない者を出してもいいんですか！？殿下がいつまでも引きずっていても生きている者にも亡くなつた者にも失礼だわ！！」

殿下は黙ったままだった。

「……殿下。あなたの元気は今傷を受けた者達を元気にします。だって殿下はおバカさんでしょう?」

殿下は顔をあげた。

「ふふ。殿下のおバカ加減には私いつも困ってます。だって、辛いときも元気になるんだもの。というか、辛くなれる時間がないんです。そんな時間を今生きて頑張っているものにあげてください」

にっこり笑うと殿下は口を開いた。

「……ローズにはやっぱり叶わないな」

困った顔をして笑う殿下。

「しかし、一国の王子をなんでもバカバカというなんて、さすがの俺も傷つくぞ?」

「まあ!!それはすいません。ついすっかり思ってる事が口に出てしまっ……!」

大げさすぎるくらい驚いて見せた。

「……ローズ……」

はあ。っと溜息をついたかと思うと殿下は自分の頬を両手で叩いた。

「そつだな!!この国にはまだたくさんの方がいる。私がしっかりせねば皆困ってしまうな!!」

「そうですね!!さあ!殿下のおバカを皆に振りまきに行きましょう!!」

「ローズ……。元気と言ってくれ……」

2人して顔を見合わせて笑った。

殿下が立ち直ってくれてよかった。

殿下が元気でないとなんだか私も悲しくなってしまうのだから……。

\*\*\*\*\*

あれから殿下は落ち込んでいた事がウソの様に、明るく振舞った。多少無理している感じはあったものの、殿下の笑顔が傷を受けたもの達に笑顔を与えた。

「殿下!!私、殿下が好きです!!」

小さな小さな女の子が殿下の前にやって来て言った。

「なんと!嬉しいな。しかし、そなたが結婚できるまで私は待てな

いぞ」

女の子は泣きそうになってしまった。

「すまないな。私にはすでにローズがいるからな。そなたならもつと素敵な男性があらわれるだろう」

にっこりと笑う殿下。

「殿下！！なんで私が関係あるんですか！！そんな小さい子にウソつかないでください！！」

横で聞いていればある事無い事しゃべって！！

「何を言う！これは私の本音だ！！そして近いうちそうなる！！」

何を勝手に決めちゃってしてくれてるんですか！！

「バカなこと言っていないでちゃっちゃと仕事してください仕事！！」

「・・・殿下、振られちゃったね・・・」

その様子を目の前で見てた女の子は殿下の肩をポンポンと叩く。

するとそれを一部始終見ていた周りから笑い声がこぼれる。

こんな日が続いて皆の心が癒されればいいと思っていた。

あの手紙が届くまでは・・・。

「宰相様！隣国より手紙が届いたとは本当ですか！！」

ローズの所に知らせがあつたのはあの日の翌日だった。

「ああ……。ジクが捕まったそうだ。隣国の国王はジクの主をよこせと言ってきている。お前の事だ、ローズ」

確かにシグの主はローズである。しかし、なぜ私を呼びだすのかまったくわからなかった。

「……。なんの目的があつて私なのでしょう？何よりジクは私が主である事をしゃべつたのでしょうか？」

捕まつた時には主の名を出すなどもつての外だ。

ジクはそれがわからないほど馬鹿ではない。

となると自白剤を使われたか？

しかし、そういったものにも耐性をつけている……。

それなのに、なぜ情報がもれてしまったのだ……？

「わからん。すべてが謎につつまれている。おまえはどうする？行くか？それとも、ジクを捨て置くか？」

殿下でさえ捨て置かれるのに、宰相様がわざわざ聞いてくるといふ事は真相を探つてこいという事だ。

「……。行きます。殿下には内密でお願いします」



殿下に知られてしまったらつるさそつだ。

「……それは無理だな。もうすでに知っている。そろそろ来ると思うぞ?」

にやりと笑う宰相。

この人は何があってもこのままなのだろう……。その時まさに遠くからこちらに向かって走ってくる音が聞こえた。私は溜息をつきこちらに向かってくる人を迎える準備をした。

「ローズ!!!!!!」

「はい。殿下、お茶いかがですかあ?」

「……もらつ」

「ずずず。」

「つてそうじゃない!!ローズ行くな!!」

「え?なんですか?それ。ちょっとそこだけ聞いたら勘違いする人いるから辞めて下さい」

恋人の別れみたいじゃないか!!

「ローズ!!!ふざけてる場合じゃないだろう!!行かなくていい!此処にいる!!こちらで何とかする」

ふざけるのは殿下の専売特許ですもんね。

「はぁ……。落ち着いてください。誰が行くと言いましたか？」

「……え？では……？」

「行きません。捕まるシグが悪いのです。そんなものの為にわざわざ私が行くわけないでしょう？」

「……ローズ。それは少し言いすぎでは……」

「いいえ！間者としてのシグの意識が低いのです。相手に見つかるなど言語道断！！そんな間抜けは捕まって拷問されて死んでしまっても文句も言えませんか！」

「……ローズ？」

「まったく、情報ひとつ掴んで来れないわ、相手に捕まるわ、主の名前は出すわでどうしようもない馬鹿ですよ。相手にくれてやりますよ。そんな奴」

「ローズ！！言いすぎだ！！ジクはいつも国の為に頑張ってくれているのだ。国の為に捕まってしまったものをそんな愚弄するような事は私は許さない！！」

「……そうですよね」

にっこりと極上の笑みを浮かべた。

「……………ローズ？」

殿下は呆気にとられていた。

「そんな事を言って助けに行かないなんて愚弄するも同じですよね？殿下」

ぐつと殿下は喉を詰まらせた。

「まさか……………ローズ」

「ふふ。殿下が上手く乗ってくれて助かりました。もちろん、ジクを助けに行きます」

「だ、ダメだ!!」

殿下は慌ててローズを止めようとした。

「殿下？殿下が言われたのですよ？国の為に捕まったものを愚弄するなど。国の為に捕まったジクを捨て置く事は愚弄する事ではないのですか？」

殿下の顔は真っ青になっていた。

「殿下、国に迷惑がかかってはなりません。私は今日かぎり宰相補佐官の任を下ります。これは私個人がしでかした事だと思いい下さい」

膝を下りスカートを摘み正式な礼をして殿下に申し出た。

「な、ならん！！それはダメだ！！これは国の事だ！ローズが一人で犠牲になる事はない！！」

「殿下！解ってください。国として動けば戦争になってしまつかもしれません！私一人であれば個人のしでかした事として私が責任をとればいいだけなのです！」

「駄目だ駄目だ！！ローズ、一人で背負うことはない！」

「殿下？嫌いになりますよ？そんな駄々っ子みたいな事を言わないでください」

苦笑しながら姿勢を元に戻す。

ふと、周りを見るといつの間にか宰相様の姿はそこになかった。

「……私はこの国が大好きなんです。殿下がいて、意地悪だけど宰相様がいて、町の皆がいて。だから、この国の為に働ける事は私の誇りです。その誇りを取り上げないでください」

「……ローズ」

涙をうかべる殿下。

この間のしっかりした殿下は一体どこへ行ったのだから……。

「殿下……。私、殿下が傍にいてくれてとても楽しかったです。いつもうざいくらい私に好意を抱いてくださって……。いつの間にか私も殿下が傍にいる事が当たり前だと思っております。だ

から、この間、私に黙って行かれた時にはとてもショックでした」

殿下は黙って私の話に耳を傾けていた。

「ただ私は黙って行かれたからショックだと思っていました。殿下が戻ってこられて、救えなかった者の事を思い落ち込んでいらした時、私、気付きました。殿下を守りたいと……。殿下の笑顔をずっと見ていたいと……。私の言っている意味解りますか？」

まっすぐに私の目を見てうなづく殿下。

「私、殿下を愛しております。そして、同じくらい殿下が守っておいでのこの国を愛しているのです。すこしでも私がこの国の平和に役立てるのなら、喜んでこの身を差し出す覚悟です。わかってくださいますね？殿下」

殿下の目がまっすぐこちらを見ている。

それは、殿下がわかってくれたという事だった。

「ローズ……。お前が無事に戻ってくるまで、私は待っている。先に言われてしまったが、私の妃となるのはローズ、お前だけだ。かならずシグを助け、無事に戻って来てくれるな？」

「はい」

殿下の目をまっすぐと見つめ返事をした。

その視線を殿下の視線によって捕えられた。

そのままお互いの距離が縮まるとそっと殿下の唇に触れた。

甘く……。切ない口づけだった。

唇が離れると、私は無言でその場を後にしたのだった。

「……良かったのか？」

部屋を出るとそこに宰相様が壁にもたれかかっていた。

「……覗きですか？セクハラで訴えてもよろしいですよね？」

ジロリと睨むと、宰相様はニヤリと笑った。

「やれるものならやってみろ。私の所で握り潰してやる」

「……職権濫用も甚だしい……」

「……馬車くらい用意して下さるんですよ？」

宰相様に負けなくらいのニヤリを返してやった。

「ああ。表にまたせてある。それに乗って行け」

準備のいい事だ。

「ありがとうございます。では、宰相様。行ってまいります」

ぺこりと頭を下げると、宰相様の前を通って馬車に向かった。

「何かあればすぐに連絡しろ。出来る事はこちらでやる」

後ろから宰相様が叫んだ。

始めて宰相様の叫ぶ姿をみるな・・・

\*\*\*\*\*

隣国へは2日かけてたどり着いた。

城下では王族間で争いがあつた事など嘘のように賑わっていた。

「この国の城下はこんなにも賑わいを見せているのに・・・なぜ王族間では争いごとがおこるのかしら」

城の中で起こっていることと街とではまるで違う世界に見えた。そう思っていると、城に到着した。

「わあ！大きなお城！うちの国の2倍はあるかも・・・」

この辺では一番の大国だというのに、うちの国は質素儉約とか言うて何気に王宮は小さかったりするのだ。

門番に名をつげ、謁見の間に通してもらった。

意外とすんなり入れるものなのね・・・。

長い廊下を歩いて行くとつきあたりには大きな扉があつた。門番が来客を告げると大きな扉が開き中へと通された。

「こちらでお待ち下さい」

そういうと、門番は扉から出て行った。  
私は周りを見渡した。

「わぁ……。なんか無駄にお金使ってるって感じ……。こんな  
置物なんて何の意味があるのかしら……」

目の前に置かれていた何かの像を見ながらぼつりとつぶやいた。

「……まったく意味はないな」

ふいに後ろから声が聞こえた。

「無駄な物が多いと思わないか？この部屋だけでもこの国の負債を  
軽く賄える」

だったら、全部売ってしまえばいいのに……

「……売ってしまえばいいと思っただろう？」

……なぜまた此処でも読まれなければならないのだ。

「ふ。お前は顔に出やすいな。良く言われるだろう？」

ええ……。言われますとも!!

そういうと男は台座の上の席に着いた。

「……この国の新しい国王様ですか……」

「そつだ。お前が問者の主か？」



「……ご存じだったのでは？」

「いや、知らん」

「!!!!!!あの手紙には……」

「そんなものカマかけただけだ」

涼しい顔をして笑っていた。

「……では、一体何が目的でしょう？ジクは無事なのでしょう  
か？」

「うむ。無事といえば無事だが、無事でないといえば無事でないな」  
ち、この新しい国王は一体何なんだ。

「まあ、そうカリカリするな。お前、名はなんと申すのだ？」

「……ローズです」

「ローズか。よくここまで女一人で来たものだ。それとも我が国が  
舐められているのか？」

「……此処へは私の意志で参りました。国はまったく関係ありま  
せん」

「ほう、国としては見捨てておく駒をお前が個人的に取りにきたと  
？」

「そうです。ジクを返して頂けますか？」

ぎろりと新国王を睨むと国王は笑いだした。

「……何がおかしいのですか？」

「こっちは真面目に話しているのにこの新国王の態度に腹が立った。

「……いや、すまぬ。ローズ、お前は何も知らないのだな……」

すると、途端に新国王の顔が真面目になった。

「……お主のいう『ジク』とやらが素直に帰るのならば返してやる。しかし、その前に話しておかなければならない事がある」

「……なんでしょう」

「お前の国では我が国に何か恨みでもあったのかな？」

「は？……唐突に何の事でしょう？そんなものあるわけがありません」

「正直に言え。お前個人で来たと言うが、間者を持つくらいだ。それなりの地位に着いているのであるろう？」

「……この国王、なかなかするどい……」

「……今はただの小娘にすぎません」

「ほう。しかし、以前はやはり王宮で勤めておったか。ローズ、お前の国の宰相補佐官は確か女性だったな」

こちらに視線を向けるとにやりと笑った。

「……それで、何がしたいのですか？」

ほぼ確信をもったのだろう。

国王は顎に手を当てて何やら考え始めた。

「……宰相補佐官の耳に入らないくらいか。……やはりあの件で動いていたのか……」

ぶつぶつ何かを言っていると思ったら、急に視線をこちらに向けた。

「ローズ。我が国はお前の国と戦争をしたいと思っているわけではないぞ」

「は？」

突然何を言い出すのかと思えば、あんな事をしておいて今更だ。

「では、なぜ我が国を襲うような真似をされたのですか!! 罪のない民を殺しておいて良くそんな事が言えますね!!」

殿下は、その事をとても悔やんでおられたのに!!

怪我をした人達の中には家族を亡くした者もいたのに!!

「……落ち着け。あれを仕掛けたのは私ではない」

国王は衝撃的な言葉を口にした。

「…………何をおっしゃっているのですか？確かにあなたの国がこちらを襲ったと聞きました。あの村のものもそう言っております」  
怪訝な顔をして、国王を見た。

「国の立て直しにはかり目がいつて、国境の方であんな事が起こるとは思っていなかった。それに関しては私の落ち度だ」

…………聞いていた話と違うようだ。

「…………あなたが国の立て直し？国王家族の惨殺をしたのでしょう？」

国王相手にこんな事を言うのもどうかと思ったが、少し聞いていた話と違う雰囲気 of 国王に直接聞いてみたかった。

「国王家族の惨殺？私が？…………はっ、ジクとやらにそう吹き込まれたか」

呆れた様に国王が言葉を吐き捨てた。

一体どういう事だろう？

ジクがウソをついたとでも……。

「……まさか……」

ローズは血の気が引く思いだった。

「そつだ。お前の間者はすでにお前の手を離れておる」

国王の意味するところ……、つまりジクは私たちを裏切っていたという事だ。

「……なぜ……」

「ローズ、お前はこの部屋に入った時無駄な物が多いと言ったな？」

確かに無駄なものというか、なぜこんなものが？とは思った。

「……はい」

「それは前国王夫妻が国の資金を散財しておったからだ」

そんな！？

ローズの知る前国王夫妻はのほほんとして、とても華やかなイメー  
ジなど湧くような方々ではなかった。

「そんなはずありません。あの方々は我が国に來られた時も民の事

を気にし、民の為にと色々と施して下さっております！」

「……ふん。そんなもの、よその国にばれないようにだろう？我が国の民であれば皆が知っておる。自分たちの税金で無駄なものを買い湯水のごとく金を使うとな」

……そんな……。

「……しかし、それとジクに何の関係が？」

「……お主は本当に全く知らないようだな？」

はあと深いため息を国王がついた。

「……ジクとやらは一度前国王に捕まっておる」

「……え!？」

そんなことは全くもって知らされていなかった。

「その際にお前の国の情報をこちらに流す事で釈放され、その上給金も出す事となった」

「……そんな……。こちらの情報を……」

ローズは力が抜けその場に座り込んでしまった。

「……それから、いい情報があるたびに国王はジクに褒美を取らせた。好きなものを好きなだけ買い与えたのだ」

・・・まさか。自分のもとに来るジクはお金を望んでいるようには見えなかった。

「しかし、ジクは先に給金をもらわねば仕事は出来ないと言いました。しかも、今までの倍額でだ。それを聞いた国王は命を助けてやった恩も忘れ、更に要求を突き付けてくるようになったジクを不要な存在だと思いはじめ、我が国から追い出そうとした。・・・追い出したところで戻る国があるのだがな」

我が国の事だろう。

「だが、奴はそれを知って腹を立てたんだ。・・・もうすっかりと金の虜になっていたんだろう。自国の給金ではやっていけない。それならば、この国を滅ぼしてしまおうとも思ったのだろうな。国境近くで騒ぎを起こした。・・・それが、今回の出来事だ。わが軍を従わせ自分の国を攻撃したのだ。それも、戦争になるようにと・・・」

ローズは思わず目を瞑ってしまった。

まさか・・・

自分の臣下がそんな事をしていとは思ってもよらなかった。



「それから、こちらに隣国から連絡がきた。その時初めて前国王はジクが戦争を仕掛けた事を知ったのだ。前国王はジクを呼び出し、なんて事をしてくれたのだと問い詰めた。ジクはジクで今更自国に戻ることも出来ない。給金だって微々たるものだ。と怒鳴り散らしながら我が国王を手にかけてしまった。運悪く、そこに王妃が入ってきて、その状況を見た王妃は、怒りに震えジクに斬りかかったそうだ。だがジクにかなうわけもなく王妃もその場で殺されてしまった。私が駆け付けた時にはすでに遅くジクが消えた後だったのだ」

国王は話し終えたところで、ローズを立たせ近くにあったソファアに座らせた。

「……ローズお前には辛い話かもしれない。だが、我が国もかなりの痛手を負ったのだ」

国王は向かいのソファアに腰を下ろした。

ローズは頭の中で国王が言っていた事を考えていた。

「……つまり、あの時の肩の傷は王妃様にやられ、その前には国王様も手にかけていたと……!?  
なんて事だ!!」

信じていた者に裏切られただけではなく、自分の臣下が戦争を引き起こそうとしていたなんて!!

「……申し訳ありませんっつ。知らない事とは言え、我が臣下がそんな事を……!!」

ローズはソファァーから滑り降りるように床に頭をつけた。

「……よせ！お前のせいではない。国王に捕まった時点でもうお前  
の手を離れておったのだ」

国王はローズの腕をとり立たせようとした。

「いいえ！！これは私の目が届いていなかったからです！臣下を信  
用しすぎてこんな事をしてる事も知らなかったとは本当に情けない  
……」

国王の手を振りほどき距離をとった。

「ジクはもちろん、私にも責任がございます！！国王様のお好きな  
ように罰してくださいませ！！」

ローズは隠し持っていた短剣を国王にさしだした。

「……こんなものを持っていたのか……」

ふう……と国王は溜息をつく。ローズの差し出した短剣を手にした。

「……覚悟はできているという訳か？」

「はい」

「……何があってもお前が責任をとると？」

「はい」

「……命をかける程の者か？」

「……ジクの為ではありません。自分の為です」

「……その為に命を捨てることもおしくないか？」

「はい」

「……ふう……」

「では、覚悟致せ！！」

国王は短剣を抜き、大きく振り上げた。

ローズは思わず目を瞑り体をこわばらせた。

いつまでたっても痛みを伴う事はなかった……。ローズはそうつと目を開けると、国王の手から短剣は消えていた。

「……これで、お前の気にするものはいなくなった」

国王の視線は私を通り過ぎ私の後ろに向いていた。その視線の先を追って後ろを振り向いた。

「……あがつ!!」

私の真後ろにいたのは、この事件を引き起こした張本人だった。

「……ジク!!」

ジクの首には短剣が刺さり、そこから真っ赤な血が次々と流れだしていた。

「……牢に入れておいたはずなのだがな……」

国王がぼつりとつぶやきジクに近づいた。

「……お前の主に言う事があるだろうか？」

国王がそういつとジクは私の方をみた。

「……はっ……なんにも知らないこんな小娘に言う事はない……しんじるほうがばかなんだ……」

冷たい視線をむけられ最後の言葉を吐いたとともに、ジクは床に倒れこんでしまった。

「……ジク……」

こみ上げる涙はジクが死んだから泣いているのだろうか？  
それとも、裏切られた事に泣いているのだろうか……。  
自分でもわからない気持ちの中で、頬に冷たいものが落ちて行った……。

「この者を片付けよ!!」

国王が叫ぶとどこからか近衛達がやって来てジクを運んで行った。

「……あいつの亡骸はこちらで処理をさせてもらおう。よいな」

国王の言葉に首を縦にふった。

「……お前一人が抱えるには大変かもしれない。だが、お前の国との和平はこれまで通りでいたいと思う。……国に帰り、この事を伝えてくれるな？」

そつと私の傍まで来て国王は私を包んだ。

「……っ！こくおう……さまっ……！」

急いで離れようとする私の肩をぐっと捕まえ先程以上にぎゅと私を抱き込んだ。

「……無理をするでない。泣きたいときに泣かねばそれはいつまでも心の中に巣食ってしまう。辛い思いをいつまでも抱えず、今涙とともに流しておけ」

その言葉をきき、ローズは国王の胸でわんわんと泣いてしまった。

「……お前一人で抱え込むとは……。一体、お前の国の国王はどうなっているんだ……」

ぼそりとつぶやく国王だったが、悲しみに暮れて大泣きをしていたローズには聞こえていなかった。

しばらくして、落ち着いた私は国王様から離れて、国王に促されてソファアに座っていた。

「……みつともない所をお見せして申し訳ありませんでした……」

ハンカチで目元をぬぐうと、国王に謝罪をした。

「……いや、かまわん。泣きたいときに泣け。大体、女が泣く事は悪い事ではないだろう?」

にやりと笑う国王はどこか宰相様に似ていた。

「……それは、武器として使う時に限ります」

「ふむ。軽口が聞けるようになったか。しかし、大いにその涙は活躍しておるぞ?」

「は?……どういう事ですか?」

「ローズ、私の妃にならないか?」

あまりに唐突過ぎて何を言われたのか一瞬分からなかった。

「……御冗談を。からかわれるのなら、他のお相手にしてください」

まったく失礼な話だ。

さっきまでシリアスな話をしていたのに、この切り替えの早さは一体何なんだ!?

「……冗談ではないぞ? 私は、本気でお前が欲しいと思った」

「バカな事を言わないでください。……まだ、私が何か致しましたか?」

もしや、シグの件以外にも何かしてしまっていただろうか?

「……お前の恋愛回路はどうなっておる? なぜ、そんな発言に繋がるのだ?」

不思議そうに首をかしげる国王にこっちが首をかしげたいくらいだった。

「……それはこちらのセリフです。なぜ、私を妃にしようなどという発想が出てきたのです?」

「それはお前、お前ほどの勇敢さや頭の良さ、優しさなどに惚れたに決まっておる。裏切り者の為に流す涙をみても純真な奴だと思っただ。お前の様な奴を私は探していたのかもしれない」

国王は先程まで座っていたソファから腰を上げ私の前で膝をついた。

「!!おやめください!!」

慌てて席を立とうとするが、国王に止められた。



「そのままです！ふ、この手も真っ白で美しい」

国王は私の左手をとると手の甲にキスをし、そのままの形で視線だけを私の方へ向けた。

「ローズ、私とこの国の立て直しに貢献してくれないか？私と結婚してくれ」

ローズは顔を真っ赤にしてその場に立ちすくんでしまった。

「ふふ。お前は賢いだけでなく可愛いのだな。ますます手元に置きたくなった。国に報告が済めば迎えをよこす。こちらに戻ってきたら結婚式をあげよう」

あまりの事に固まっていたローズは、勝手に進む話に焦ってしまった。

「ま、まっってください！！私には心に決めた人がおります！国王様と結婚はできません！！」

何とか、口から言葉がこぼれおちた。

「……心に決めた者か……。どんな奴だ!？」

国王は食い下がってくる。

「……どんな奴と言われても……。とても素晴らしい人です」

「……素晴らしい?ふむ……。ぜひ会ってみたいな」

ニヤリと笑ったと思うと国王は、手をたたいた。

「うむ!そうしよう!お前の心に決めた奴とやらを見に行ってみようではないか!」

「え?……。ええええ!？」

あまりの事に思わず叫んでしまった。

「無理です!無理無理無理!！」

敬語を使うのも忘れるくらい焦ってしまっている。

「無理なものか!すぐに用意をする。一緒にお前の国に行こうではないか!」

「はああああ?ダメです!ダメダメ!」

「……うるさい奴だのお。お前は自分が納得できない事を確かめずに諦められるか？」

うっ！そう言われてしまうと……いや、まあ。確かめたくなくなるけども……」

「……しかし！一国の国王がホイホイと他国を訪れるなど無理に決まっているでしょう?!」

「なあに、無理なものか。私はこの国の国王だぞ？優秀な部下があれば何の問題もない」

「でも！今はほら！この国の立て直しが必要とおっしゃったではありませんか！」

「そうだ！その為にお前が必要なのだ。お前を得るために動く事は国政と一緒にしろ？」

いやいやいやいや！

違います!!

そんな事国政にしないでください!!

もう、すでに開いた口がふさがらなかった。

「さあ、そうと決まれば早速出発しよう。どちらにしろ、私が新国王となった挨拶にも伺わねばならんところだったし、丁度よいわ！」

はははと笑う国王様。

どちらかというところが国政だ!!

と突っ込みを忘れるくらい私は焦っていた。

だって、まさか心に決めたヒトが我が国の王子なんて……

言えないでしょ!?

「何をしておる?早くしろ。行くぞ」

行くと決めた国王の行動は早かった。

あっという間に、馬車の用意をしすでに馬車に乗っているのだから・  
・。

私は、悲しみに暮れる間もなく国王のペースに流されすっかりと国王の隣りに座っていたのだった。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

2日間かけてまた来た道を戻った。  
すると、見覚えのある城が見えてきた。

「ほお……。あれがこの国の城か。ふむ、なんとも無駄のない城だ」

「……。国王様。質素と言って下さって構いませんよ?」

「質素だな」

おい!即答か!!

「……しかし、いい城だ。わが国もこのくらいで事は足りるのだ。他に使った金は民に行き渡るようにすればよかったものを……」

……前国王はお金使いが荒かったと言っていた。

今の国王は本当に民の事を考えている。

見た目はイケ面。しかし、口が悪いのが玉にきず

だが、いい国王様だという事が今回の事でよくわかった。

「……貴方様が国王になられて、本当に町に住む方々は幸せになれるですね」

にっこりと笑って思った事を口にした。

「なに！？惚れたか！？ではすぐに戻って結婚式を挙げよう！」

「いやいやいや！！惚れてません！すぐそっちに持って行くのやめてください！」

つまらん。と口をとがらせる国王は最初にあつた時とはだいぶイメージが変わって来ていた。

「殿下!!! 大変です!!! 隣国より新国王が来られました!!!」

急ぎと飛び込んできた衛兵は、とんでもない事を口にした。

「なに!!! ローズは!? ローズは無事か!」

「・・・殿下。心配するところが違うでしょう!!!」

とても愛しい人の声が聞こえた。

「ローズ!!!」

「待った! 抱きついたら怒りますよ!?!」

そう言われ、急いで急ブレーキを自分にかけた。

「・・・ローズ。無事でよかった」

「殿下。ご心配おかけいたしました。ただいま戻りました」

ローズは丁寧にお辞儀をした。

「こいつか。ローズ」

愛しいローズの後ろから、聞き覚えのない声が俺をこいつ呼ばわりした。

「……………ローズ？それはだれ？」

「あ、あの……………」

ローズが言いづらそうにその男を見上げると、そいつは事もあろうに俺のローズの肩を抱いた。

「ローズの婚約者だ」

「何！？婚約者！？」

思わずそいつを睨んでしまった。

「違う！！違うでしょう！！国王様！！」

ローズがそいつを国王様と呼んだ。

……………と言う事は、さっき飛び込んできた衛兵がいていた、隣国の新しい国王か？

「……………貴方がフィナル国の新しい国王ですか」

「うむ。そうだ。ノードンだ」

「……………国王様、ノードンっておっしゃるんですね……………。知らなかった……………」

ぼつりとローズがつぶやいた。

「そつだぞ？言っておらんかったか？すまぬな。だが、これから知る時間はいくらでもある。あんなことやこんなことまで教えてやる」

ニヤリと笑う新国王の意図は変態的な意味も含まれていたのだろう。  
何を言うんだ？この馬鹿国王は！  
ほら！ローズは純真だから、何を言われているか解らず首をかしげているではないか！！

「はは。私のローズをお気に召して頂けたようで光栄です。しかし、先程聞き捨てならぬ事をおっしゃられてましたが、御冗談もお上手だ」

「冗談？ほお、そちには冗談に聞こえたか？私は本気で言っておるのだがな。今回の報告の為に、ローズを一度こちらへ連れてきたが、私は一緒に連れ帰るつもりだ」

何を！！

ローズを連れ帰ると！？

「……おふざけもほどほどにして頂けませんか？ローズはこの国の者です。ましてや、国王の妃など……」

「お前は偏見の塊か？本人が承知しておれば何の問題もなかるう？」

「……では、ローズが承知したとでも？」

まさか……

隣国に言っている間になにかあったのか……？

「してません！……」



ローズが思い切り否定した。

「何。すぐに気など変わるわ。こいつではお前を持って余してしまう  
だろう？」

2人が親しそうにしているのが気に入らなかった。

「私がローズを持って余すなど・・・はっ！ありえませんか！」

こいつはすでに俺の中のうざい人物1位の栄光に輝いていた。

「・・・いい加減にしてください！！2人とも！！」

ローズの一声で、俺と新国王は黙った。

まったく、ほっておいたらくだらない事でいつまでも話が進みやしない。

「いいですか？国王様も殿下も私の事は置いておいて下さい！とにかく今はジクの事です！！」

私の言葉を聞いてか、殿下はハツとした表情になった。

「……ジクはどうした」

「俺が殺した」

国王がまた、勝手にしゃべりだした。

「なに！？殺しただと！？」

「ま、まってください！！殿下、これには訳があるのです！！国王様も黙っていてください！報告は私の役目です！！！」

2人ともまた静かになった。

「ふう……。殿下。報告申し上げます」

姿勢を正し、隣国で合った事を話した。

「……ジクが……」

殿下も信じられない様子だった。

「……はい。私が狙われていたところをこちらの国王様にたすけていただきました。私とした事が、後ろにいた事に気づきませんでした……。ジクの死は当然の事だったので……。」

またもや、涙がこみ上げてきた。

「……そうか。辛い思いをさせて済まなかった。ローズ」

傍に殿下がやってきて肩に手を置いた。

「……女を慰めるときは抱きしめてやるものだろう……。まあ、さつき私がつてやったからもういいだろうがな」

また!!余計な事を!!

こみ上げた涙も瞬時に引っ込んだ。

「……抱きしめたとしても……?」

おお……。

殿下の声色が変わった……。

「ああ、わんわんと私の胸で泣いたな。なあ?ローズ」

その口縫い付けてしまいたい気分だ。

「……ローズ?それは本当かな?」

穏やかな口調だが声色はさつきと変わっていない……。

黙ったもん勝ちだ。

「…………ローズウ？」

もう片方の手が開いている方に置かれた。

ひひひひひひひひ。

「…………抱かれましたが、それは抱かれたというより…慰められたという方が…………」

「ふうん。抱かれたんだ？」

「い、いえ。ですから、慰めて頂いた…………」

肩に置かれた手が徐々に下がっていく。

抱きしめられるかと思ったら、急に手のぬくもりが消えた。

「ったく。そんなことぐらいで嫉妬するようではまだまだだ。好きな女を怯えさせてどうする」

頭の上から国王様の声が聞こえた。

「…………離せ」

「離してもよいが、もうローズを怖がらせるなよ？」

「…………っ。わかっているー!!」

何も頭の上でやり取りをしなくてもよいだろうに…………。

動きようがなく困っていたら、またもや聞き覚えのある声が聞こえた。

「殿下、いいかげんにしてください。隣国よりはるばる来て頂いたのです。ローズなどを取り合っている場合ではないでしょう！」

「……ローズなど……。」  
「ひどい……。」

このひどさは間違いなく、宰相様だ。

そう思い、顔を上げるとすぐ横に宰相様が立っていた。

「……ローズ、いつまでそんな所にしゃがんでいるのですか。邪魔です。どきなさい」

上から見下ろされさらに怖みを増す。

「……はい」

赤ちゃんがやるようにハイハイをしながらその場から離れた。

「大変失礼しました。ノーダン国王様。あちらの部屋で陛下がお待ちです。どうぞ、ご案内いたします」

「うむ。こちらの国は宰相がしっかりしているのだな。まあ、私のローズをなど呼ばわりした事はわすれてやろう」

「はっ。ありがとうございます。では、こちらへどうぞ」

宰相様が国王様を連れて部屋を出た事にほっとしたのも束の間、後ろにはただならぬ気配で立っている殿下がいたのだった。

「・・・・・・・・ローズ・・・・・・・・」

「で、殿下！！私はこれで失礼しますね！！では！！」

さっさと家に帰ってしまおうと思ったら、首根っこを掴まれてしまった。

「・・・・・・・・でんか？」

「ローズ・・・・・・・・。無事でよかった」

そういうと、殿下は私をギュッと抱きしめた。

「・・・・・・・・殿下・・・・・・・・」

「すまない。一人で危険な目にあわせてしまつて。情けないよな・・・・・・・・。殿下とか呼ばれながら俺は何も出来ないんだから。辛い思いをしていたローズを抱きしめる事も出来なかつた・・・・・・・・」

「・・・・・・・・殿下・・・・・・・・。大丈夫です。私を隣国へ行かせて下さつてありがとうございます。おかげで自分でけりをつける事が出来ました」

殿下からそつと離れ、頭を下げた。

「・・・・・・・・大丈夫なのか？本当に」

「はい。自分の兄のしでかした事です。欲に目が眩んだものの末路なのでから……」

そう。ジクは私の兄だった。

私たち兄妹でこの国の為にと働いていたのに、兄があんな事をしていたなど信じられなかった。

「……ジクには悪いが、こちらで用うこともできない。今回の事はなかった事になるだろう……」

「……構いません。それよりも、兄がご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

「……いや……」

殿下もそれ以上は何も言えないようだった。

「……私は、家に帰ります」

頭を上げにつこりと笑い殿下に告げた。

「……ローズ、こんなときにこんな事を言うのは不謹慎なのだろうが、俺と結婚してくれるだろう？」

「……殿下……。……それは出来ません」

きっぱりと否定した。

「なぜ！？俺を愛してくれているのだろう？」

「はい。愛しております。ですが、こうも申し上げたはずですよ。この国も愛しているのです」と。兄がしでかした事が他の者に解つてしまえば殿下のお立場は危うくなってしまいます。こんな私を選ぶより、もっと身元のしつかりした方をお妃様にしてください」

そういうと、私は殿下が何かを言う前に私はその部屋から飛び出した。

殿下の妃になりたかった。

馬鹿みたいな事を言い合つて、楽しい家庭を築きたかった。

しかし、兄のしたことは許されない。

この国を裏切つたのだから。

兄の罪は私の罪。

兄の思いに気づいてあげられなかった。

もしかしたら、どこかでサインを送っていたかもしれないのに！！

兄の思いに気づけない私が殿下の傍にいて、支える自信などない。私よりももっと殿下の事を支えて差し上げられる女性を見つけてくれればいい。

走って走って、もう走れないと思う頃には日が傾いていた。

「……これから、どこに行こう……」

「……だから、俺の所に来いと言っているだろう？」

「……国王様……」

なぜこんなところに？

「なぜかって？お前を追いかけたのだ。あまりにも遅くてすぐ



に追いついた」

「・・・足が遅くてすみませんね・・・」

「ふむ。まだそんな口が聞ける余裕があったか。傷ついたローズを慰めてそのすきに私という存在を刻みつけてやろうと思ったのだが？」

「・・・そういうことをべろつと口に出さないでください」

「ははは。伝えないとわからないだろう？」

国王様は私の隣に来てそこに私を座らせた。

隣に座る国王様に視線を合わせることもなく私は不思議に思っていることを聞いた。

「……何故、私なのですか？国王様でしたら女性はよりどりみどりでしょう？」

「ふ、よりどりみどりとはい面白いな。まあ、確かにそうなのだが」

笑う国王様をちらりと横目で見れば、次の瞬間には真面目な顔をしていた。

「……別に妃など誰でも良かったのだ。ローズ、おまえでなくともな」

ニヤリと笑う国王様の顔に悪びれた様子は微塵もない。

「我が国をきちんと考えてくれる奴ならばな……」

「……私がそうだとも？」

「うむ。お前ならば民の事を考え、前国王夫妻の様な事はないと思つた。まあ、お前を知るたびにお前はそれだけではないとわかつたがな」

「買い被りすぎです」

国王様からの視線が痛かつた。

「そうかな？お前は国の為にこの国の王子から逃げたのだろうか？」  
心に何かがぐさりと刺さった。

「お前ではダメだと思ったのだろうか？・・・兄の事があるから」

「！！ご存じだったのですか？」

思わず顔をあげ、国王様を見た。

「当たり前だ。自分の国を揺るがそうとする奴の素性ぐらい調べる。  
・・・まさか助けに来るのが妹のお前だとは思わなかったがな」

「・・・そうですか」

良く考えれば当たり前前の事だ。

「・・・お前の目の前で兄を殺した私を怨むか？」

「・・・いいえ。あれは兄が悪いのです。贅沢に目がくらみ自分の国を攻撃させるなど・・・私でも許せません」

「・・・そうか。しかし、それである王子のもとを去るといのは関係ないだろうか？」

「いいえ。関係あります。私はこれでも宰相補佐官でした。国の安全の為にいつも翻弄している宰相様を補佐する立場。それなのに、そんな私の部下が国を脅かす存在だったなんて・・・。何かしらの処罰があつて当然なのです。そんな私が、王子のお側になどいら

れるわけがありません」

「しかし、お前は今その立場にないだろう。処罰の対象でもない。ただ兄を助けに行っただけだ。その兄が罪を犯していようが、妹には関係のない話しだ」

「……そういう訳には参りません。兄の罪は私の罪です」

「……なぜ、そう頑なになる？お前は王子の側にいたくはないのか？」

そんなわけがない。

王子の側にいたかった。

「……わからんな。しかし、お前が王子のもとから離れたいというのならば、私は手を貸そう。我が国に滞在すればよい」

国王様は私の手を取り立ちあがった。

「そんな！！兄がご迷惑をかけてしまったのに私までご迷惑をおかけすることはできません！！」

国王様の手を振りほどこうとしたが、その手はしっかりと握られていた。

「構わん。しかし、お前がどうしても気にすると言つのならば、我が国の立て直しに協力をしろ」

「……私ですか？……それは、妃になれということですか？」

「妃云々は後々考えろ。先程も言ったが、別に妃が今すぐ必要だというわけではない。理由がなければお前はこの国から出られないのだから。もちろん、私の妃として来たいというのならいつでも歓迎するが?」

にやりと笑う国王様。

「それはご遠慮させていただきます。しかし、・・・私がお役に立てるのでしょうか・・・」

「立ちそうにもないものをわざわざ誘わん。時間の無駄だ」

きっぱりと言われると返事のしようがなかった。

「ふ、決まりだな。今夜にでも我が国に戻るとするか。出発までに必要な物をまとめておけよ!」

国王様は勝手に決めてしまうと、握っていた手を離し来た道をさっさと戻って行った。

国王様の強引さに吃驚しながらも、私はどこかほっとしていた。

この国においては、殿下は私に近付いてくるだろう。

私もそれを拒むことが出来るかどうか不安だった。

側にいたいという想いと側にいてはいけないという想いに苦しんで  
いただろう。

「……良かったのかもしれない……」

強引だが、国王様の優しさが伝わってくる。

私は家に帰り、国王様とともにフィナル国に行く準備を始めた。

「……とりあえず、着るものだけでいいかしら？」

こんな事を言ったら不謹慎かもしれないけど、こうして荷物をまと  
めてるとなんだか……

旅行に行くみたい！！

「……なんて……。気楽な気分ではないわね……」

はぁ……。

殿下にはなんて言おう？

いや、言わない方がいいかも……。

言った時の事を想像すると背筋がぞっとした。

「ひい！！……恐ろしい！！絶対、殿下には言えない！！」

すぐさま荷物をまとめると、国王様のところへ走った。

「・・・国王様にも口止めしなきゃ！！た、大変なことになる！！」

私が！！

私は、必死に王宮まで走った。

\*\*\*\*\*

「こ、国王様あゝ・・・」

はあはあ・・・

走り過ぎた。

息が出来ない・・・

「ローズ？どうした。そんなに早く私に会いたかったのか？」

ちがう！！

と言いたいが声が出ない。

「はあ・・・はあ。・・・ふゝ・・・」

「まあ、水を飲め」

国王様に差し出された水を有り難く頂いた。

「ぶはあ！！・・・はあゝ！！疲れた・・・」

生き返ったようだ。

「それで、そんなに急いできた用はなんだ？」

「そうです！国王様！私がフィナル国に行く事は殿下に黙っておいて頂けますか！？」

「ふむ……。そんな事か。それは構わないが、お前はいいのかわ？」

「いいんです！いいんです！でない大変な事になりますから！！」

私が！！！！

「まあ、黙っておけると言うのなら黙っておくが……」

国王様は何かを言いかけたが最後までは言わなかった。

「では、ローズも来たことだしそろそろ行くとするか。よいか？ローズ」

「はい……」

今まで生まれ育ったこの土地ともお別れだ。

自分がここを出ていくななんて思いもしなかった。

国王様に促されて、馬車に乗った。

「この国の宰相に挨拶はよかったのか？」

宰相様か……。



挨拶しておかないとうるさそうだ。

だけど、宰相様に挨拶をしたら必ず殿下にも伝わってしまうだろう。当然帰ってくる予定もない事だし、宰相様への挨拶も省略しよう！

「……いいです！」

「ならば、出発する」

国王様はそれ以上何も言わず、馬車は再びフィナル国へ向かって動き出した。

### 30 (後書き)

さて、ここで第1章は終わりです。

次回からは第2章となります。

2章の内容は………

ぜひ、2章をご覧ください！

しかし、ちょっとだけ……。

主役のローズはもちろん殿下も国王も登場します。

裏で誰かが動いていました。

ローズと殿下の為に誰が動いていたのか……!?

……まあ、キャストは限られてるのですぐにわかってしまつかと  
思うのですが………

新たなキャラも出てくる予定です！

どうぞ、第2章もよろしくお願い致します。

## 1 (前書き)

いつも読んでくださっている皆様ありがとうございます。  
本編より第2章の始まりです。

ローズが殿下の元を去ってから1年が経っております。

「国王様!!!!!!」

城中に私の声が響く。

いつの間にあんな事を企んでたんだか!!!!!!

「国王様!!!!!!」

ちっ。すでに逃げた後か!

「あつ!ねえその人!」

前を歩く騎士に声をかけた。

「ローズ様。また、国王様をお探しですか?」

またって……。

まあ、確かに最近よく城の中を走り回ってはいるけど……。

「国王様でしたら、先程お庭の方へ歩いていらっしやるのをお見掛け致しましたよ?」

それを早く言って!!!

「ありがとうございます!」

騎士に礼を言うと、庭に向かって走り出した。

「・・・まったく、なんで私が!! どういう事かちゃんと説明してもらわなくっちゃ!!」

庭に着くと足を止め、辺りを見回した。

するとひよっこりと草花の間からキンキラの頭が見えた。

「・・・あそこか・・・」

溜息をつきながらそのキンキラ頭に向かって歩き出した。

「国王様!!」

「おお! ローズ!!」

「『おお! ローズ!!』じゃありません!! 一体、どういふことですか!! ちゃんと説明してください!!」

腰に手をあて、そこに座っている国王を見降ろす形で怒鳴りつけた。

「うつるさいのお・・・。そんなに大声出さんでも聞こえておる」

「大声を出されなくなったらさっさと説明してください」

「・・・1年前はもっと大人しかった気がするんだがなあ・・・」

ぽつりとつぶやく国王に思わず舌打ちしたくなった。

あれから、あつという間に1年が過ぎた。

この国の国王に拾ってもらわなければ私は立ち直れていなかったか

もしれない。

しかし、だ！それとこれとは別の話。

「なぜですか！なぜ私が宰相様の養女にならなければいけないのですか！！！」

そう！問題はそれなのだ！

今朝、執務室に行くとき宰相様から養女になる為の書類にサインをしろと言われた。

イキナリの事に驚き思わず宰相様に掴みかかってしまった。

「・・・なんだ、その事か。私はてつきり・・・」

ぼそりつぶやく国王。

「てつきり？・・・なんですか！他にもまだ何か企んでいるんですか！？」

下がった目尻がまた上がった。

「い、いや！なんでもない！・・・よ、養女の件は前にも話しただらう？正式にこの国の者となれ」

「そのお話は前にもお断りしました！」

昔は妃になれとうるさかったが、私が徐々に本性を現すとそれは言わなくなり、かわりに正式にこの国の人間となるように言われ続けていた。

「いや、これは国王命令だ！・・・って、宰相からも言われたら

う?」

飄々とする国王に更にイラっとしてしまった。

「だ・か・ら! !なぜ、この国の人間にならなければいけないのですか! !私は、この国の人間でなくてもこの国の為に働いています。しかも、宰相様にはちゃんと可愛い娘さんがいるではありませんか! !」

「ふむ。では、公爵あたりの娘がよかったか?」

ち・が・う~~~~!!!!

だから、そういう意味じゃないんだって!!

馬鹿か?それともわざとか!!

・・・この国王ならわざとだわ!!

「国王!!」

「わかった、わかった。ちゃんと話すからそうカツカツするな!」

ニヤニヤとしつつも少し困ったように私を落ちつかせる。

国王はしぶしぶ話始めた。

「実は……、この国の人間でないお前が施政に関わるのを反対するものがある事は知っているな？」

「……はい」

当然と言えば当然だ。

だから、以前から私は城下で働くと言っていた。

「そいつらが最近更にうるさくてな。もういい加減ウンザリなのだ。だからと言ってローズを手放すと誰がお前の後を継ぐ？お前程優秀な奴は今のところ他にいないのに」

国王は深いため息をついた。

「……よつて、周りを鎮静化させる為にもローズを我が国の人間としたいのだ。大体、こんな事がもとであと一歩というところまで終わった立て直しを無駄にさせるような事はローズ……、するわけないよなあ？」

痛い!!

今すごい痛いところを突かれた。

「お前の一声で問題などすぐに解決するのだからな？」

にやりと笑う国王の顔が悪魔に見えた。



「……わ、わかりましたよ！！養女でもなんでもなります！！」

「おお！！わかってくれるか！さすが、ローズだ！！早速、宰相に知らせよう！！」

大げさに喜ぶ国王。

殴っていいですか？

殴っていいにきまつてますよね？

繰り返すようになるパンチを片方の手で押さえながら、しぶしぶ執務室へ戻った。

「宰相！！宰相！！」

国王が大声で呼びながら部屋へ入ると、宰相様は慌てて席から立たた。

「こ、これは！国王様！！ローズがまた何か致しましたか！！」

汗を拭うちよっぴりぼっちゃりしたおじ様。

つて、なんで私が何かしなくちゃいけないのよ！！

「喜べ！ローズがお前の養女になる事に納得したぞ！！」

「さ、左様ですか……」

宰相様……。明らかに焦ってませんか？

何さ！嫌ならなんでこの話を受けたんだ！！

「し、しかし、ローズは本当にそれでよいのでしょうか？」

「良いと言ったのだ！・・・お前は嫌なのか？」

国王の視線が鋭く宰相を捉えた。

「・・・国王。宰相様ビビってますから」

大体、宰相様の娘になるってなんか実感わかないしな。

宰相様ってなんか小物って感じだし・・・。

私だって、どうせ養女になるならもっと大物の楽出来る家の子がいのに・・・。

はあ・・・。

国王は宰相を睨み、ウサギのようになっていいる宰相の姿を傍観していた時、執務室のドアがノックされた。

「誰だ！！この大事な時に！！」

国王はちよつといらいらした声で扉の外にいる者に声をかけた。すると、外にいた者が扉を開け中に入ってきた。

「失礼しますよ？おや、お取り込み中でしたか？」

その顔には優しい笑顔が浮かんでいた。

「・・・オーランドか」

国王は部屋に入ってきた人物を見た。

「国王？・・・皆さんおそろいで何されているのですか？」

オーランド様は、ほんわかとした空気を纏っていた。

「実は、宰相がローズを養女にすることを渋っておるのだ。お前からもなんとか言ってくれ」

肩をすくめる国王にオーランド様はさらになっこりと笑顔になった。

「ほお。ローズをですか？でしたら、私の所でお引き取り致しましたよ」

いきなり何を言い出すんだ？この人は！！

あ！国王の顔がにやりになった！！

「・・・どういうことだ？」

「宰相様はご自分の娘がいるのに養女をとるのは娘さんに気が引けてしまわれるのでしょうか。でしたら、子がいない私の所ではいかがかと」

軽く言っているが、オーランド様！！

それでいいのですか！！

こんな大きな娘がいきなり出来るんですよ！！！！

言葉には出せないながらも目で必死で訴えた。

「ふむ・・・。オーランドの所か・・・」

顎に手を当てて考える国王の横で、オランダ様がこちらに向かってウインクをしていた。

「よし！そうしよう！オランダ！！ローズを頼むぞ！！」

「はい。この年で娘が出来るとは思いませんでした。妻も喜ぶですよ」

取り残された宰相は口を開け、その様子を見守っていた。

同じくらい、私も取り残された感があるのはなぜだろう……。

これって、私の事だったよね？

「オ、オーランド様！！よろしいのですか！！」

話は済んだとばかりに部屋を出ていく国王の後にいたオーランド様を呼びとめた。

「・・・ローズは嫌かい？」

深く刻まれた目元のしわがオーランド様の雰囲気をさらに際立たせた。

「いいえ！！宰相様の所に行く位でしたら、オーランド様に引き取られた方が数万倍マシです！！」

「こらこら、宰相殿がいる前でそんなこと言う物じゃないよ？」

こつんとおでこにげんこつが落ちて来たが全く痛くなかった。

「申し訳ありません・・・。しかし、本当によろしいのですか？」

ちらりと上目づかいで見上げれば、いつもの優しい笑顔がそこにあった。

「ローズ。君がこの国のために一生懸命働いてくれた事は私も知っているよ？そんなローズが私の娘になってくれたのならば残りの余生も楽しそうだと思ったのだ」

頭を撫でられている時点で私は子供扱いだ・・・。

「オーランド様がそうおっしゃられるのでしたら・・・。しかし、私みたいな者が養女となって公爵様の名に傷が付きませんか？」

オーランド公爵と言えば、この国一番の有力者だ。

人柄もさることながら政治に置ける手腕もこの方の右に出るものは居ないと言われている。

「そんなことを気にする事はないよ。大体、私が申し出た話なんだからね」

そういうとオーランド様は国王を追いかけのように去っていった。

「良かったではないか！ローズ！オーランド公爵のようなところへ養女へ行けるなど、お前にとっては夢のような話だぞ」

今までのすっかりその存在を忘れていた宰相がいた。

仕事はできるのに、必要のないことをべらべらとしゃべるのが悪い癖だ。

「左様でございますね。さあ、宰相様も頭を抱えてた問題が解決したのですから、さっさと仕事をなさってください！そういうえば、先日、民より要望のあったあの案件はどうなっただらうっしゃるのですか！？」

「おお！そつだそつだ！その件でお前の意見を聞きたい！」

仕事の話となると嬉々として話し出す宰相は問題が片付いたとばかりにすっきりした顔をしていた。

「・・・仕事の事でしたらいい上司なんですがねえ・・・」

ぼそりとつぶやく私の言葉は宰相の耳には届いていなかったらしく、さっさと自分の席に戻り資料を取り出ししていた。

それにしても、養女だなんて国王もイキナリ何を考えているんだか。あの理由も絶対に建前だ。

何かしらの事を企んでるはず・・・。

「はあ・・・」

考えると気が重くなり、溜息が洩れた。

\*\*\*\*\*

あれから国王はオーランド様の養女とさせるべくさっさと手続きを行なった。

「私の手にかかればこんな書類もあっという間だ!」

うふふ。

殺意が芽生えたけど我慢しましたよ?

偉い? えらいよね?

「ローズ・・・。辞める。その笑みは怖いし、殺気が隠しきれない・・・」

後ずさる国王に言われにっこりと笑った。

「うふふ。失礼しました。ついすっかり隠しきれないくらいの殺意が芽生えたもので」

国王は苦笑いをしたかと思えば、私の発言をきかなかったかの様にオーランド様を呼んだ。

「オーランド！今日からローズがお前の娘となる。これから、ローズを頼むぞ？」

「はい。お任せ下さい。この話をしたときには妻も大喜びでした。新しい家族が出来た事心より感謝いたします」

国王にお礼を言うオーランド様を見て、こんな娘で良かったのかと不安になる私だった。



「オーランド様、ふつつか者ですがこれからどうぞよろしくお願い致します」

オーランド家に向かう途中の馬車の中で私は頭を下げた。

「ローズ、今日から私の娘になったのだよ？父と呼んではくれないのか？」

にっこりと笑うオーランド様に戸惑いながらもその名を口にする。

「お・・・お義父さま・・・？」

「うーん。やはりそう言われるのは嬉しいものだね」

いつもと変わらぬ笑顔でそんな事を言われてしまったのはこちらが照れてしまった。

そうこうしている内に、目的の場所に着いたのか馬車が止まった。

「さあ！今日からここがローズの家だ」

言われて見る家は、さすがというかなんというか私には分不相応ではないかと思うくらい大きな家だった。

「あなた！！」

家から飛び出してきた女性はこちらをめがけて走ってきた。

「マリー。ローズ、紹介しよう私の妻のマリーだ」

そういつとマリーはローズの両手を包み込むように握った。

「貴方がローズね！待っていたわ！まあ！なんて可愛らしいのでしよう！こんなに可愛い子が私の娘になるのね！」

落ち着いていて物静かなオーランド様とは対照的に明るくて元気な女性だった。

「あ、あの！ふつつか者ですが、これからどうぞよろしくお願い致します」

慌てて頭をさげる私にマリーはにっこりと笑った。

「ふふ。こちらこそよろしくね！さあ、こんなところで立ち話もなんだわ！早く家に入りましょう！貴方のお部屋もお披露目したいわ！」

握られた手をひかれながら私たちは家の中へと入った。

「さあ！今日からここが貴方のお部屋よ！」

そういつて開いた扉から飛び込んできた景色はなんとというか……とても、ファンシーな部屋だった。

「マ、マリー様……。これは……」

「まあ！マリー様なんて他人行儀だわ！お義母さんと呼んで頂戴！」

目を丸くして怒るマリーはちっとも迫力がなくむしろとても可愛かった。

「お義母様？あの……このお部屋を私に？」

「ええ！そうよ！……気に入らなかったかしら？」

首を傾げる姿もまたかわいらしく、気に入らないなど口が裂けても言えなかった。

「い、いいえ！とても気に入りました！！あ、あの大きな熊のぬいぐるみなど可愛くて素敵です！！」

ベットの横に置いてある大きなティベア……。  
もうすぐ21になる娘の部屋に置いてあるものなのだろうか……

「そうなの！もう、あの子は一目ぼれして買ってしまったのよ！ふふ、気に入ってくれて嬉しいわ！」

きやつきやと喜ぶお義母様は一体いくつなのかと思ってしまうのは仕方のない事ですよね？

部屋の前で騒いでいると、この家の侍女が下でオーランド様が待っていると伝えてくれてほっとしたのは言うまでもない。

侍女の登場によりしぶしぶ階下へ降りるお義母様の後ろをついてオーランド様の待っている部屋に入った。

「……マリー。あまり騒ぎすぎるとローズがつかれてしまつよ？」

今までであった事を知っているかのように苦笑しながらオーランド様が言う。

「そうね。つい嬉しくて・・・」

そう言いながらさりげなくオーランド様の隣りに座るマリー様をみると2人の仲の良さが伝わってくるようだ。

「ローズ、君も座りなさい。これからの事を少し話しよう」

そう促されて私も2人の向かいの席に腰を下ろした。

私が席に着くとオーランド様が話し始めた。

「ローズ、君は賢い子だからきつとこの縁組を不思議に思っているだろうね」

にっこりと笑ったままなのに、いきなり核心をついてきた。

「……はい」

「うん。実はねこの縁組にはもちろん理由があるのだよ。国王には黙っていると言われたけれど、それではきつとローズは納得しないだろうからね。私たちとしても納得した上で家族になりたいと思っているんだ」

向き合うオーランド夫妻はにっこりと笑った。

「……こんな私で宜しいのでしょうか？」

誠実な言葉についてしまった。

「もちろん！ローズを養女に迎えたいと言ったのは本心だよ。ただ、お互いに納得しないと本当の家族にはなれないからね」

両親がいなかったわけではないが、幼かったころになくなり兄と2人だった。

その兄も1年前に国を裏切り亡くなってしまった。家族のいない私にはとても嬉しい話だった。

「……それで、理由と言うのは……」

本当の家族になりたいと言ってくれるオーランド様に答えたかった。

「それが……」

言いにくそうに口籠るとオーランド様は置かれていた紅茶を一口飲んだ。

「実は、ローズの結婚話が上がっているのだ」

「へ!？」

あまりの突飛な話に思わず変な声が出してしまった。

「今すぐにはないようだが、国王が内々に進めているらしい……」

「

「あ、あの……どういう事でしょう?」

結婚?

「それが私にも詳しい事がわからないのだ。これは本当に国王お一人が進められているようですね……」

……あんの国王……

「……それで、私が養女になるのと何か関係があるのでしょうか?」

「うむ……。確かではないがたぶん、身分の高い方なんだろう」

「……………どうしてごうも王族というものは身勝手なのだろう」

「どうする？今ならまだ取り消す事も可能だぞ？」

オーランド様は相変わらずにつこりとした顔で聞いてくる。しかし、隣りにいるマリー様はすごく悲しそうな顔だった。

「……………いいえ。こんな私ですがオーランド家の養女にして頂けますか？」

この話を引きつけてくれたオーランド様に申し訳ない。こんな私でもいいと言ってくれたのだ。

かなりファンシーながらも、私に来るのを楽しみにしてくれていたお義母様。

そんな人達を裏切るような事はできない。

「ローズ！！嬉しい！！これで本当の娘となるのね！！」

横にいたオーランド様の肩にすがりつくように泣き始めたマリー様を見てると本当に望んで私を養女にしてくれたのだと改めて感じ、心が温かくなった。

「……………本当によいのだな？」

オーランド様は確認するように問いかけてきた。

「はい。ふつつかな娘ですがこれからよろしくお願い致します。お

「義父様、お義母様」

「養女となる過程がどうであれ私は、このオーランド家の娘になる事を心から言んだ。」



昨日の今日で落ち着く間もなくお義父様と仕事に行く事に不満を漏らしていたお義母様だが、私の着るドレスを身立てて飾り立ててくれると落ち着いた様子で送り出してくれた。

「……すまん。ローズ」

馬車に揺られながら目の前に座るお義父様に苦笑されながら謝られた。

「……いいえ。私も気を利かせて休みを取るべきでした。……しかし、この格好で登城するとは……」

舞踏会にでも行くのかと思うくらい飾り立てられてしまった。

「はは。あちらに着いたら着替えなさい。それに、家族となったんだ。気を利かせる必要はないよ」

穏やかに笑うお義父様に頷くとなんだか、くすぐったい感じがした。王宮に着くと、お義父様と別れ急いで着替えまっすぐと向かった。もちろん、あの人の元へ……。

「国王!!!!!!!!!!!!!!」

ノックもなしに部屋へ入る事は禁止されているが怒り心頭のあまり思い切り扉を開けた。

「おお！ローズ！どうだ？新しい家族や家は」

何事もなかったように振舞う国王の元に近づいていくと力いっぱい机を叩きつけた。

「どづいう事ですか！！結婚って！！」

私の勢いに目を丸くしたかと思うと国王はにやりと笑った。

「なんだ。オーランドは話してしまったのか」

悪びれる様子ひとつない。

「……国王、何を企んでおいでですか」

「企むとは人間きが悪い。私はお前の為を想って動いているのだぞ？」

一体何を考えているのかわからない表情に更にイライラが募る。

「私の為？勝手に私を結婚させようとしている事が私の為なのですか！？」

「……結婚なんてもう望まないと誓った……」。

「そうだ。この国の為に働いてくれたお前に人並みの幸せを掴んでほしいからな」

「……だったら、ご自分のお妃様をお迎えください。それが私の幸せです」

。 国王の？をしつかりと握ってくれるような妃が来てくれる事が・・・

「ふむ。しかし、なかなかアレ以外私の納得する妃がないからなあ・・・。やはり、ローズ私との結婚が良かったか？」

「じよおだんじゃありません！！そればかりはお断りです！」

こんな人を振り回してばかりの国王と結婚なんて・・・  
ひい！考えただけで恐ろしい！！  
私の平穩は確実に無くなる！

「・・・ひどい言い草だな・・・」

ちよつとばかりしへこむ国王にふんと鼻を鳴らした。

「大体、国王には決めた妃がおられるではありませんか！その方とさっさとご結婚でもなさってください」

こんのロリコンめ！

「・・・ローズ、わかって言っているのであるう？まだ結婚できる年ではない。第一、そうなたらすぐにも私の物にするさ」

何を思っただけで笑ったのか・・・。幼い姫の身を案じると憐れに思っ

た。  
そう。実は国王には昔から決めた妃がいた。

私に求婚したのもただの冗談だったのだ。

いや、あの時は本気だったようだが、心には嘘をつけなかったら

い。

しかし、まさかこの国王が純愛とは……。  
何しろ国王が18の時に見た生まれただかりの赤ちゃんに運命を感じたと言っただから、なんとも……。

今、その姫は12歳。現在は国王の妃になる為、一生懸命勉強中だ。

「私の事はよい。そのうち正式に決まればお前にも話す。それまでは変な虫が着かないように気をつけるんだぞ！」

ビシイ！と顔の前に突き出てきたこの指……。  
へし折ってやろうかしら……。

「さあ。わかったらさっさと仕事に戻れ！お前にやってもらう事はたくさんあるぞ！」

何かを感じ取ったのか目の前に突き出された指を即座に引っ込めると、犬でも追い払うかのように手をひらひらと動かした。

「……こんのお……くそ国王め!!！」

あんまりに腹が立ったので、ついうっかり本音を叫び国王の部屋から飛び出してしまった。

部屋の扉を閉めると同時に国王の部屋から大きな笑い声が聞こえ更にイライラした事は言うまでもない。

「……ロ、ローズ……」

びくびくしながら私に話しかけてる宰相。

「はい！？何ですか!?!」

「ひい!」

……ひいつて……

ついうっかりイライラが表に出てしまつて完全に八つ当たりだ。

「はぁ……。すみません、宰相様。なにか御用でしょうか?」

なんだか涙目の宰相が駆られる寸前のウサギの様に見えた。

「い、いや。あの、この書類を頼もうと思ったのだが……。国王となにかあつたのか……?」

私は部下なんだから、そんなにびくびくせずともガツンと頼めばいいのに……。

ウサギの様な宰相につこり笑いかけると宰相も多少落ち着いた。

「わかりました。こちらはいつまでに処理をしておきますか?」

「う、うむ。明日の昼までには終わらせてほしい」

少しいつもの感じを取り戻しつつもまだ目の奥はびくびくとした感

じが隠せない。

・・・正直な方でいいのだけれども、たまにいらぬ事をべらべら喋ったり思った事が口からストリートに出るところは何とかならぬいかしらね。

「はい。では、明日の昼までにやっておきます」

とりあえず、びくびくした宰相はウザイのでとっと会話を終わらせる事にした。

宰相は宰相であり私に絡まない方がいいと思ったのかその後は何も言わずに黙々と作業をしていた。

\*\*\*\*\*

仕事も終わりさて家に帰ろうかと部屋を出るとそこに国王が立っていた。

「・・・・・・・・・・」

見なかった事にしよう・・・。  
家でお義母様がまっついていらっしやるし早く帰ろう。

「・・・・・・・・おおい!!どういう事だ!?!なぜ無視して通り過ぎる!?!」

聞こえない。

聞こえない。

私の耳には何も聞こえない。

「待て！ローズ！！」

ローズは私じゃない。

ローズは私じゃない。

空耳空耳。

「待てと申すのに！！」

……肩に何か張り付いているようですが……。

「……そう睨むな。お前に話があるのだ」

「私にはありません！！」

肩に置かれた手をぺっと投げ捨てるとさっさとその場を立ち去ろうとした。

「……お前の元母国の事なんだがな？」

ぴたりと足が止まった。

それを見た国王がニヤリとしたのは背中越しにでもわかった。

「近々、あのボンクラ王子が婚約するそうだ」

……婚約？

頭を金づちで殴られた様な気がした。

「……シヨックか？」

振り向かない私の背に言葉を投げかける国王。

「……いいえ。別に。私には関係ありませんから」

そついうとまた足を前に進めその場を離れた。

「……強がつて……」

国王の漏らしたその言葉はもちろん私には届いていなかった。



家に帰りお義母様の美味しいご飯をたべ、綺麗な夜着に着替えベツトに腰かけた。

・・・というか、それをこなした事を覚えていない。

「・・・婚約・・・」

目の前には大きな熊のぬいぐるみがいる。

「・・・ふふ。おかしい・・・」

まるでぬいぐるみと話しているようだ。

「・・・良かったじゃない・・・良かったのよ」

声が震える。

「私じゃ彼を幸せになんてしてあげられないでしょ・・・」

目の前が歪んで見える。

「きつと素敵な人よ」

頬に冷たいものが流れ落ちた。

「・・・こうなる事を望んだのは私じゃない」

ギュッと目の前にあつた熊を抱きしめた。

思い切り顔を埋め付けて。

声が漏れないように。

涙で顔が濡れないように。

心までではなく誰にも隠してくれない。

私の心の中では黒い物がどんどんあふれ出して来ていた。

どうして？私の事を愛してくれていたんじゃないの？

あの人なら私の事をずっと思ってくれるって心のどこかで思ったた。

「何、都合のいい事考えてるんだか……」

ふっ、と笑いがこぼれる。

同時に自分の中にはまだあの人に住んでいた事を知る。

忘れたと思っていたのに。

思い出さなかったから、吹っ切れたんだと思っていたのに。

それは違った。

隠して、心の奥底に潜んでいただけ。

「……私にどうする事も出来ない……」

気づいてしまった心の本音を知っても、もう彼は婚約してしまうのだ。

あの時、どうして逃げてしまったんだろう。

逃げなければ今も笑ってあの子の隣りに入れたんだろうか？

「そんなわけないわ……。兄のした事は許されない……」

あの時はそう思っていた。  
もちろん今でも思ってる。  
でも・・・それ以上にあの人を想う気持ちは強かったのだと今更  
ながら知ってしまった。

「あの人の傍にいればよかったの・・・？傍にいる事が許された  
の・・・？」

自問自答に誰も答えてくれるわけではない。

\*\*\*\*\*

「ローズ！どうして私の前からいなくなっただんだ！？」

で、でんか？

「ああ！私のローズ！やっと帰って来てくれたんだね！もう離さな  
いよー！！」

殿下！苦しいですよ！！

「ローズ！！ローズ！！」

苦しいですって、殿下！

「さあ！今すぐ私と結婚しよう！約束だっただろう？」

え？結婚ですか？

あれ？だって誰かと婚約したんじゃないんですか？

「……婚約？」

で、殿下？

「ああ。そうだったね。もう君は必要ないんだった。俺には可愛い婚約者がいるんだ」

殿下……？

「気安く話しかけないでくれる？もう君はこの国の人間ではないんだから」

そんな！私はいつでもこの国の事を……！！

「嘘をつくなよ！兄を使ってこの国を陥れようとしたのはお前だろう？」

ち、違います！！そんな事するわけないじゃないですか！！

「どうかな？俺よりもそっちの国がよかったんだろう？」

そうじゃありません！！私は……殿下の為に……。

「俺の為？俺が本当に望んでいる事と違う事ばかりしてきたのに？」

そんな事……。だって！国の為に……。

「そう。君はいつだって国の為なんだよね？俺の事は考えてくれた？」

そ、それは……。

「いいんだよ。ローズ。もう気にしなくて。だって……。俺にはこの人がいるから」

で、でんか？……。その人は……？

「知っているだろう？俺の婚約者だよ？この人とこの先2人でこの国を豊かにするから、もう国の事は心配しなくてもいい。君の自由に生きればいいんだ」

いや……。いやです！！私は……。私はこの国が好きなんです！！殿下の事が好きなんです！！

「ローズ……。もう、遅いんだ……。すべて……。」

まって！殿下！！行かないでください！！

殿下！！！！！！！！！！

「待つて!!!」

目に映るのは自分の手。

「……………」

ふと横を見ると大きなクマが一緒になって寝ていた。

「夢……………」

なんて嫌な夢なんだろう。

だけど、あれが本当なのかもしれない。

「……………情けないわ……………」

今もなお私の心の中にはあの人がいたのだ。

「忘れたはずだったのに……………」

昨日国王からあんなことさえ聞かなければ……………。

コンコン

「ローズ、朝よ！起きなさい」

タイミング良くお義母様が部屋の扉をたたいた。

「…………はい。…………すぐに用意して食堂に向かいます…………」  
そう言うと義母ははやくね　と明るく元気な声で私の部屋の前を去って行った。

しっかりしなくては！

こんな顔で下りて行ったらお義母様に心配をかけてしまうわ。

ベットから降りると鏡の前に座りしっかりとメイクを施した。

「しっかりしなさい！あなたが決めた道でしょ！間違っでなんかないわ！」

鏡に映る自分にそう言い聞かせ、なおも私を呼ぶお義母様の声にせかされるように食堂へ向かった。

\*\*\*\*\*

「おはようございます！！」

勢いよく開けた執務室のドア。

「う……うむ。……おはよう。ローズ……。頼むからもう少し静かにドアを開けてくれ」

驚いた宰相様は持っていた書類を落としてしまったらしい。  
こちらをにらみながらも落ちた書類を拾っていた。

「はぁーい。すみません」

机の上にカバンを置くと宰相は言葉をつづけた。

「ローズ。出勤したら国王の所へ来いとこの事だ」

ため息とともにこぼれた宰相の言葉に私の手が止まる。

「国王が……」

朝から嫌な呼び出しだ。

きつと昨日の事だろう。

せつかく気持ちを入れ替えて来たのに今またあの話を聞いてしまったら私……。

「なんでもお前の結婚の事では話があるそうだ」

私の思考を遮り話を続ける宰相から出た言葉は私の思っていることとは違った。

「結婚!?!」

思わず大声をあげてしまった。

「そうだ。……お前が結婚とは……。相手が哀れだ……」

ぼそりとつぶやく宰相の最後の言葉は聞こえないようにつぶやいたのだろうがしっかりと私の耳にも届いた。

じろりと宰相を睨むと、宰相は顔をそらし自分の仕事に戻った。



「……はあ……。どうしてこう次から次に……」

あの国王の考えていることは1年たった今でも中々わからない……。  
とにかく、国王の元へ行き真偽の程を確かめなくては！

「じゃあ、宰相様。国王の所に行ってきます……」

一応上司である宰相に断りをいれ、先程入ってきたばかりの執務室を後にした。

「まったく……。あの国王は何を考えてるんだか……」

怒ることにも驚く事にも疲れ果ててしまった私から出るものはため息だけだった。

「おお！来たか！」

国王の執務室へたずねると満面の笑みで迎えられた。

「……来たかじゃありません。一体どういことですか!？」

怒る力もないと思っていたが、この国王の顔を見てしまうとどうにも怒りが沸き起こってしまう。

「どうもこうも、話しておいただろう？お前の結婚話だ」

話しておいた？

あればお義父様が話してくれたのであって国王に話してもらった覚えはない!!

ばれてしまったからしぶしぶ語った程度のもではないか!!心の声が聞こえるのならば聞いてほしいくらいだった。

「……結婚は致しませんと申し上げましたが……」

こめかみがぴくぴくとうずくのを抑えつつ、静かに国王の思惑を否定する。

「……そんなこと聞いたか？」

しらじらしい!!

「ちゃんと申し上げました!!私の事よりご自分の事を心配下さい

とね!！」

このロリコンが!！」

「あー……。言っておつたな。ふむ。しかし、これはもう決定事項だ。お前もすでにこの国の者だ。ということは私の命令は絶対だ」  
にやりと笑うその顔を見た瞬間、思わず目の前が真っ暗になった。

「……まさか……。この為だけに養女になれと……。……」

「そうだ。……そう聞いたのだろうか?」

国王の笑みは変わらない。  
思わず足元がふらついてしまった。

「……なぜ、私が結婚しなければならないのですか……。……」  
どうして、私なのだ。

この国の女性は私以外にもたくさんいるではないか!！」

「うむ。あちらも優秀な女性を欲しがっておつてな。私としても口  
―ズを手放すのは惜しいのだがこの国の為だ。いたしかたない」

もう、言葉が出ない……。……

「それに、お前の結婚により我が国の立て直しは完了する。後は維持するかさらなる上を目指すかだな。やっと前国王の尻拭いが終わるわ」

・・・私の結婚で・・・？

「ローズ？聞いておるのか？」

覗きこむ国王。

その顔を思い切り睨みつけてやった。

「ほお。さすがローズ。まだまだ反抗する力が残っておるか」

はっはっはと笑う国王に私はもう肩を落とすしかなかった。

「・・・まあ、そう悲観するでない。お前に相応しい相手をちゃんと探してやった。・・・そろそろ区切りをつける」

急に真面目な顔になって話すものだから一瞬何の事かわからなかったが、国王の言っている事はあの人の事だったのだろう。

「・・・その事でしたら、もう忘れております」

忘れるしかないのだから。

「・・・ふん。お前は本当に気が強い」

少し顔をしかめたかと思うと国王はおもむろに机の上にあった書類を取り出しそれを私に手渡した。

「・・・これは？」

「今後の予定だ。お前が嫁ぐまでのな。準備などしっかりしろ。と

はいつてもこちらで全て手配は進めておるがな」

それを見るともう2週間後にはこの国を出発することとなっていた。

「……国王。一体お相手の方はどなたなのですか？こちらにはそう言った事がまったく書かれておりませんが？」

出発までの予定はびっしりと書かれている割にこの国を出発した後  
の事がまったく書かれていない。

「うむ。それはまだ言えん。我が国の立て直しが完了してしまつたら困る国も多いからな。今回の事が外にはばれてはまずい。内々密に事が進んでおるのだ。まだお前にも教えられん」

教えられない……。

自分の結婚相手すら知らされないと云う事か？

「……わかりました。では、私は早速家へ戻り義父と義母に伝えます。もちろんこの2週間は引き継ぎさえ終われば家で過ごしてもかまわないですよね？」

相手などもう誰でもいい。

あの人でないのならば誰でも同じなのだから……。

ただ、私を引き取ってくれた義父・義母には感謝の意を伝えられた。

「お義父様、お義母様……」

目の前の2人は私をしつかりと見据えていた。

「……私のような者を養女にして下さったのにすぐにごちらを出ていかなければいけない事……」

言い終わる前に義母の目から涙がこぼれ落ちた。

そんな義母の隣に立っていた義父が私の肩に手を置いた。

「いいんだよ。ローズ、お嫁に行っても私たちの娘であることに変わりはないんだからね。そもそも、この事は始めから解っていた事だ。お前が気に病む事ではない」

にっこりと笑うお義父様。

「……すみません」

あの、国王がすべて悪いんです……。

「ローズ……。何かあったらすぐに戻ってくるんですよ!?辛いことがあったらいつでも帰って来て!あなたの部屋はそのままにしておくからね!」

お義母様……。

お父様とは反対の肩にそっと触れる義母の手のぬくもりが心を締め付ける。

「……せつかくお義母様の娘となれたのに、すぐにこの家を出ていくことをお許してください」

肩に置かれた2人の手に自分の手を重ねる。

「……いいのよ。すべて国王様がお決めになられた事なんですもの・  
・。ローズ、幸せになるのよ？」

繋がれた手のぬくもりと義母の言葉に頬に冷たい雫がこぼれた。  
それを拭うように義母の手が私の頬に触れる。

「……ローズ……」

義母はそれ以上何も言わず私を抱きしめてくれた。

義母は解っていたのだ。

この縁談は断ることが出来ないことを……。  
ひきとめることが出来ないことを……。  
久しぶりに誰かに抱きしめられる感覚に私は更に涙を流した。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「それでは、お義父様、お義母様……。短い間でしたがお世話になりました」

馬車の前で頭を下げる。

「……ローズ、道中は気をつけて……。辛ければいつでも帰っ

てくるのよ!!」

涙目のお義母様の肩を抱くお義父様も何も言わず手を振ってくれた。この国にいたのは約1年……。

国王の言葉に甘えてここで暮した。

そう思えば、今回の事はいい恩返しかもしれない。

突然の事で頭にきたけれど、辛いときに手を差し伸べてくれたのは紛れもなく国王だったのだから……。

「……あんな傲慢でわがままな国王でも色々してくれたんだもんね……。」

一体どこに向かっているのかもわからない馬車に揺られながらこれまでの事を思い出していた。

「色々あったなあ……。」

この一年大変だった。

今は国の人にも受け入れてもらっていた。

だけど初めは全くだったのだ。

よそ者がいきなり城の仕事を任されるのだ。

いい思いをするはずがない。

「ふふ……。そう言えば、最初はかなりひどかったなあ……。

書類なんて私を素通りだったし、会議があることを知らせてもらえなかったり、私が食事に行こうと思えば仕事を持ってきたり……。」

くだらないいやがらせについついキレて怒鳴ってしまったこともしばしばあった。

国王ったら絶対にそういうときは出てこないくせに私がこっそり泣



いてるといつの間にか側にいてくれたり。  
そう思ってたハッと気付いた。

「……そうか。国王が出てきてたら余計にややこしくなってたわね」

見越していたのだろう。

国王が出ていくことで私の実力が認められるわけではない事を……

「ああ……。挨拶してあげればよかったな……」

頭に来て国王には挨拶すらせずに馬車に乗った。

「結構助けてもらってたんだなあ……」

今だからわかることだろう。

今度会うことがあればちゃんとお礼を言おう。

会う機会があれば……。

揺れる馬車に体を任せ目を瞑る。

次に目を開ける頃には目的の場所についているだろう事を願って……

あれから何度目を瞑り、目覚めたのか……。

今目の前にある景色に私は口を開けずにはいられない。

「ここは……」

ぼつりとつぶやく言葉にも驚きが隠せない。

私は確かに馬車に揺られていた。

何日も……。

しかし着いた場所は……。

「相変わらず間抜けな顔だな。ローズ」

ふと聞こえた声は懐かしい声だった。

「……宰相様……」

目の前に立っている男は1年前まで毎日のように見ていた顔だ。そして、もちろん口の悪さも。

「なんだ？お前はわざわざ隣の国にアホさ加減を磨きに行ったのか？」

にやりと笑うその顔も1年前のままだった。

「……なんで……」

ひきつる顔を元に戻すこともなく私はなんとか言葉を発した。

「なぜかって？聞いているだろう？」

く、くえない……。

相変わらずこの宰相様は……。

「わ、私は結婚……。」

そつ口にして目を開いて宰相を見た。

「そつだ。お前の結婚式は明日ここで行われる」

明日？

いや、確かにそれは聞いていたが……。

「……ここで……？」

すかさず宰相が答える。

「ここだと言ったが聞こえなかったか？」

……嫌み具合も変わってないらしい……。

「どういふことですか？」

なぜ私の結婚がここで行われるのか……。

「どういふことも何もお前はこの国の者に嫁ぐからだ」

はい？

この国の？

「ま、まさか……」

この目の前の男と……。

「お？気付いたか？」

ニヤリと笑う宰相様。

「嫌です！！絶対に！！無理です！！」

「もうこれは決まったことだ」

「そ……そんな……」

「あきらめるんだな。お前が嫌がってもこれはいわゆる政略結婚だ。お前の意思など関係ない」

「ひどい……」

「何を言う！これほどいい結婚はないだろう！！」

「そんなわけないじゃないですか！！私には無理です！！」

「無理な分けないだろう。1年前までは一緒にいたのだ！」

「そんな1年前だって！！」

ただの上司としてしか見てなかったのに！！

その言葉は続けられなかった。

目の前には1年間忘れようとしていた人物がやってきたのだから。

「……………ローズ」

その声は1年前と変わりなかった。

「……………リルガ殿下……………」

目の前に立った殿下は少し背が伸びたのだろうか？

1年前よりも大きくなった気がする。

いや、背が伸びたわけじゃない。

背負うオーラが1年前までとは全然違ったのだ。

「……………久しいな。ローズ」

殿下から発せられる言葉もどこか大人びて聞こえる。

いや……………。たしかに私よりは年上だったのだが…………。

「どうした？口が開いているぞ？」

につこりと笑う顔も落ち着いた大人の顔だ。

今の殿下は私といたあの頃よりも王子らしくなっていた。

だけど、それは私の知っている殿下ではなかった……………。



結局、私は殿下に声をかけられなかった。

黙って立ちつくす私を見て殿下は困ったように笑った後、

「長旅で疲れただろう？ ゆっくり休むといい」

そういつと私を宰相様にまかせその場を立ち去った。

「ふ……。ふふふ……。ふふふふふふ」

その光景を思い出し笑いがこぼれる。

「おい。気持ち悪い笑い方をするな」

すっかりその存在を忘れていた宰相様にすかさず突っ込まれた。

「……気持ち悪いと言わないでください」

「気持ち悪いものを気持ち悪いと言って何が悪い！」

頭にこぶしが載せられるとそのまま頭のとっぺんをぐりぐりとする。

「い、いたたたたた！ 何するんですか！！」

べしい！！と宰相様の手を叩き落とそうと手を振るったが先に宰相様が手を引く方が早かった。

私の掌はむなしくも頭の上の空気を叩いただけとなった。

「おい。大人しくなっただかと思えば変わらないのか。まったく、何をあつちで学んできた事やら……」

腰に手を当ててはあと溜息をついた。

「・・・一体何なんですか！なぜ私がここに戻ってこなければいけないのですか！！どうして・・・」

涙ぐむ私に宰相様は再び溜息をついた。

「お前、ここに来た意味を忘れたのか？ここへは結婚をする為になつてきたのだろう？この結婚で得られるものはなんだ？そんな事もわからないのか？」

こぼれそうになる涙を食い止め、宰相の言葉に頭を働かせる。

「この結婚で得られるもの・・・」

大国の宰相と我が義父達の国の利益。それは考えるまでもなかった。

「立て直しの最終・・・。つまり国の強化・・・と言う事ですか？」

確かにこの国とフィナル国が友好を築けばこれ以上ないくらいの力を持つ事なる。

しかし、それで政略結婚とは・・・。

「一体、いつの時代の話ですか」

今時、そんな事をしなくても、条約をかわせば済む事だ。



「まあ、そう言うな。立て直し中のフィナル国が我が国に訪れる時間がなかったのだ」

「・・・確かにここ一年国王の忙しさが半端じゃない事はわかったが、それにしても今時・・・」

「しかし、私が宰相様に嫁いでもあまり意味はないのではありませんか？」

やはり宰相と言えども国を担っているのは国王である。

王族に嫁いだ方が効果が高い。

もちろん、そんな事だったら今すぐにも私はお義父様とお義母様の所へ飛んで帰るが。

「は！？私と？・・・はあ。・・・なるほど・・・それでか・・・」

宰相様は私の言葉を聞いた途端、目を丸くしたかと思えば溜息の嵐。終いには一人で納得している。  
なんだ？一体・・・。

「ふむ。お前と結婚しても確かにあまり意味はないが、とりあえず我が国とフィナル国との繋がりを誇示できるからな」

自分で言いながらなぜか溜息をついている。

「・・・そんなに私と結婚するのが嫌ならば断ってくれればいいものを・・・」

「そう言う訳にはいかない。これは決まったことだからな」

相変わらず人の思考を読むのが趣味なのか。

考えていたことに対しての返事をされたので、それ以上何かを言うのはやめ、ゆっくりと休む事にした。

今さら何か言ったところで明日には宰相と結婚しなければいけないのだから。

私の為にと用意された部屋に案内してもらい、部屋に入るなり私はすぐベットに横になった。

「…………殿下……………」

今日の殿下は全くの別人のようだった。

目をつむり眠りについた私の頬に一筋、涙がこぼれた。

それに気付くことなく深い眠りへと誘われた。

この瞬間は明日の事など忘れて

「はぁ……。お美しいですわ……」

鏡越しに本気で見とれている侍女に私は苦笑いする。

「……。ありがとう。あなたの腕がいいのよ」

「いいえ！とんでもございません！どれもこれもすべてローズ様を引き立てるだけにしかすぎませんわ！！」

力説する侍女に更に苦笑しながらも、こんなに嬉しいと思わない花嫁は自分くらいだろうと思わず鏡の自分に眉を寄せる。

今日はいよいよ、宰相様との結婚式。

昨夜、ベットに入り横になったまま朝を迎えてしまった。

ここまでの度に相当疲れていたのだろう。自分でも朝起きた時は信じられなかった。

「ふふふ。こんな素敵な花嫁様を迎えられるとは我が国も安泰ですわね！」

何も知らない侍女は嬉しそうに私の髪をセットしていく。

「……。私などがいなくても、この国はずっと安泰でしょうに……」

ぽつりとつぶやいた言葉に侍女は即座に反応した。

「何をおっしゃいます！この婚姻は誰もが心待ちにしておりましたわ！」

なんとも大げさな侍女だ。

誰もなんて、ただの政略結婚に大げさな話だ。

「さあ！出来あがりました！このままお時間まで少々お待ち下さいね！私は少し会場の方を見て参ります」

そう言うと侍女は部屋を出て行き私一人が取り残された。

「……笑っちゃう」

鏡の中の私は誰もが憧れてそしてきつと幸せな時に着るであろうドレスを身に着けていた。

「こんな不幸そうな顔した花嫁なんてきつと私くらいでしょうね」

別に不幸だなんて思っていない。

だけど、好きでもない人と結婚なんてしたくなかった。

いくら恩返しだと言ったって、心の中では納得なんてできない。

ましてや、この国に戻って来てしまったら嫌でも目に入ってしまう。

「私って未練がましかったのね……」

自分自身に話しかけていると、先程の侍女が戻って来てそろそろ会場の方へお願いしますと告げた。

もう一度鏡の中の自分を見つめると、私は覚悟を決めその部屋を後にした。

\*\*\*\*\*  
\*\*

「では、ローズ様。こちらからお入りください」

王宮の広間で行われる結婚式。

宰相様だからだろうか？

普段は王族しか行えないこの場所での結婚式に私は一瞬戸惑った。

しかし、隣国から嫁いで来ると言う名目上この場所になったのかも  
しれないと思いついた。

そして、扉が開けられる。

中からは、パイプオルガンの音が響き渡った。

私の旦那様になるであろう宰相様はすでに祭壇前で待っている。  
しかし、ここからは少し距離がある為はつきりと見えない。

顔にはベールも掛っている。

一歩一歩ドレスを踏まないよう慎重に歩きながら祭壇を目指す。

これで、私の役目も終わりかな。

そう思いながらまた一歩祭壇へと近づく。

しかし、近づくにつれ私は自分の目を疑った。

観客の中に・・・宰相様？

一歩、また一歩と祭壇に近づく。

しかし、その手前の観客の中にいるはずのない宰相様がこちらを見てにやにやと笑っている。

「・・・な、なんで・・・」

そこにいるのが宰相様ならば、あそこで待っているのは？

ハッと顔をあげ祭壇の前にいる人物を見る。

だけど、その人は背中を向けている上、自分にかかっているベールが邪魔で良く見えない。

それでも、足だけは勝手に前に進む。

宰相様を見つけた時から、私の心臓は大きな音を立てて鳴っていた。

「ま……まさか……」

止まりそうになる足。

それとは逆にどんどん速くなる心臓の音。

その人の姿形がはっきりと見える頃には私は視界がぼやけていた。そして……。

「ローズ」

優しく私を呼び掛ける声にあふれる涙が止まらない。

「……でんか……」

すぐ側まで近付いた私に手を差し伸べる殿下。

私がこの手をとってもいいの？

ためらう私の考えを読んだかのように殿下は祭壇から下りてきて私の手を取った。

「ローズ？もう逃がさない」

優しいけれどはっきりとした意思が含まれている言葉。

「君がいなくなって俺がどれだけ悔しかったかわかる？」

握りしめられる手から伝わるぬくもり。

ずっとこのぬくもりを探してた。

「だけど、好きな女性一人守れない。側にいてもらえないような男じゃ駄目だと思ったんだ」

そつと、殿下は私を祭壇の前に導く。

「この1年本当に辛かった。君が側にいなかったからね。だけど、君にふさわしい男になれるよう、この国を守るよう必死に頑張った」

繋がれた手のぬくもりが消え、私の目の前にかかっていたベールが捲られる。

「そして、今君を手に入れる。もう2度と離さない」

強いまなざしが、遮るものなくまっすぐ私に降り注ぐ。

「ローズ、こんな形で君をここに引っ張り出してしまったけれど、君は俺と結婚してくれる？」

綺麗に整えられた化粧はすでに意味を成していないだろう。

きつと、今の私はひどい顔をしてる。

「……でも、私は……」

否定の言葉を出したと同時に殿下は言葉を遮った。

「ローズ。君の本当の気持ちを知りたい。ジクの事は関係ない。そんな事で本音を隠してしまわないで」



殿下の瞳はまっすぐに、心の奥底から私の事を思ってくれていることが伝わってきた。

「私の本当の気持ち……」

しっかりと見据える殿下の瞳から目がそらせず、思わず口にしてしまった。

「……殿下を……殿下を愛してます。誰よりも!!」

それは心の叫びの様に。

そして、やっと告げられる想いに、私の心は軽くなった。

その瞬間、広間中から喝采が起こった。

「ローズ。ありがとう。……今まで辛い思いをさせたね。これからは俺が側にいて君を守るよ。だから君ももう逃げないで？俺の側にいてくれるね？」

につこりと笑う殿下を見て、私は涙が止まらなかった。

殿下の言葉にコクリとうなづくとき殿下はそっと私を抱きしめてくれた。

そして、祭壇から向き直ると、広間にいる人たちに向かって叫んだ。

「今、この瞬間より、この者を私の妻とする！意義があるものは？」

殿下が問うとその場が静まり返る。

「では、フィナル国公爵家令嬢ローズ・オーランドを我が妻とする事をここに宣言する!!」

すると、静まり返っていた広間が瞬く間に盛り上がった。

あちこちから聞こえる賛辞の声。

あまりの事に私は何が何だかわからないでいると、そつと殿下が耳打ちをした。

「ローズ、これは宰相とフィナル国の国王が企んでいたことなんだよ。もちろん、途中から私も参加したけどね」

につこりと笑う殿下。

ふと広間を見れば、ここにいるはずもない国王様の姿があった。目が合うと、にやりと笑ってこちらに親指を立てた。

「国王……」

国王には随分と酷い事を言ってきた。

ここへ来る前も挨拶すらしなかった。

それなのに……。

嬉しそうにこちらを見ている国王は泣くなと言わんばかりに手を振っていた。

「ローズ」

私の肩を抱き寄せる殿下。

「私たちは幸せだね。こんなにも大勢の人たちに祝福されて」

広間を見渡すと、たくさんの人たちが私たちに拍手をしてくれていた。

その中には、宰相様も、国王様も、さつき準備をしてくれた侍女も

いた。  
その想いに私は今までにないくらい泣いてしまった。

16 (前書き)

最終章です。

あれから2年。

「殿下！……！」

「ロ、ローズ……。」

「もう！あれだけ仕事はさぼらないで下さいと言っているのに……！」  
首根っこを捕まえ殿下を執務室まで引きずっていく。

「だって……。」

「だって……。じゃありません！！先にお仕事を済ませてきて下さいと何度も申し上げているでしょう……！」

「でも、いてもたってもいらなくなっただんだ！」

「殿下……！」

執務室に放り投げようとしたところに宰相様の笑い声が聞こえた。

「ローズ、それくらいにしておけ。殿下も反省しておられるではないか」

「宰相様！甘いです！殿下ったらさつき執務室に放り投げたのに、1時間もしないうちにまたやってきたんですから……！」

そう、本日はこれで2度目だ。

「うーん……。それより、宰相様はやめろと言っただろう？もう、お前は妃なのだから」

フォローのしようがないようで宰相様は話題を変えた。

「宰相様だって妃扱いしてないじゃありませんか！それにこっちの方が慣れてしまってますしねえ……」

「まあ、なんだ。とにかく、あまり殿下を邪険にしてやるな。じゃないとこっちも仕事が進まない」

そんな事言われても……。  
邪険にしてるつもりなど一切ないのだけれど。

「ローズ!!」

またもや、誰かが私を呼ぶ。

いや……。この声は……。  
ちらりと声のする方を見ると、

「……国王」

はあ。

「なんだ！遊びに来てやったのに溜息とは!!」

いや、だって国王。

1か月に1回は来てるじゃないですか。

いい加減にしてくださいよ。

「しょうがないだろう？少し離れているとどうしても顔が見たくなくなるんだ。我が娘の様にかわいくてな」

また、人の考えを読んで……。

「ノーダン。お前の娘ではないぞ！」

国王の言葉に殿下が口を挟んだ。

「そんな事知っておる。娘の様だと言っただけだ」

にやにやと殿下に話しかける国王を見てまたもや溜息をついてしまった。

国王ったら。殿下で遊ばれてるわね？

これじゃ、一体誰に会いに来たのかわかりやしないわ。なんて、人知れず溜息をついた時だ。

「ローズ様!!!リリイ様がお呼びです!!!」

慌てて侍女が駆け込んできた。

「あらあら？今度は何かしら？」

侍女と共に夫婦の寝室へと向かう。

そして、そこにいたのは……。

「リリイ？どうしたんですかぁ？ん？お腹すいたのかな？」

半年前に生まれた可愛い私たちのベイビーちゃん。

「ローズ！！リリイは何だったって!？」

おっぱいをあげている最中にも関わらずパンツ！！とドアを開けてくる殿下。

そのあとを楽しそうに歩いてくる、宰相様と国王。

そう、国王が会いに来たのは我が娘リリイ。

宰相が邪険にするなど言うのは、リリイだけでなく殿下にも構えと。まあ、十分殿下には構っている気がするんだけどね。

とにもかくにも、人が赤ちゃんにおっぱいを上げているのにもかかわらず平気で入ってくる男3人を部屋からつまみだした事は言うまでもない。



## 16 (後書き)

長い間、お付き合いくださいました皆様。  
本当にありがとうございました。

稚拙な文章で読みにくく意図が伝わりにくい部分も多かったと思います。  
それでも、たくさんの方に読んで頂けている事にとっても力を頂きました。

後日、番外編などを書いていこうと思うので、まだ完結とは致しません。  
また、お時間があるときにはのぞいて頂けると嬉しい限りでございます。

今後、また新連載を書いていこうと思いますので、そちらもお時間のある時にのぞいてみて下さい。

長い間、本当にありがとうございました！

睦月

番外編 宰相様と国王様

ローズが旅立った後、王宮では大騒ぎだった。

「宰相！！ローズはどこへ行ったのだ！！」

王宮中を走りまわったのだろうか？

肩で息をしながら私に駆け寄ってきた。

「……殿下。ローズの行方は解りません。騎士にローズの家を訪ねさせましたが、ローズはおらず旅行かばんがなくなっていたそうです」

殿下がローズのいなくなった事に気付いたのはローズがこの国を出た翌日だった。

「なぜだ！！……なぜ、ローズは……」

悔しそうに顔をゆがめる殿下を見ると心が痛むが、今の2人には距離が必要だった。

「……ローズも思うところがあったのでしよう。殿下、ローズをしばらくそつとさせてあげましょう。あれでも兄が裏切りを働き、目の前で殺されたのです。心を休める暇を与えてやって下さい」

殿下は訝しげに私を見た。

「宰相……お前は……」

気付いたか……。

しかし、殿下はそれ以上何も言わずご自身の部屋へと戻って行った。

私は知っていて殿下に黙っていた。

ローズが旅立つ前、隣国の国王が私の所に来て話した事を……。

\*\*\*\*\*

「ローズを我が国に連れていく」

「はい？」

突然の言葉に思わず聞き返してしまった。

「ローズとこの国の王子が今、一緒にいては国が壊れるだろう」

国王は唐突に話し始めた。

「傷を舐めあうだけでは、この国は潰れてしまうぞ。いいのか？ 宰相として」

それは先程の2人のやり取りを見ていて私も思ったことだった。

「……それは困りますね。あの方にはしっかりと頂かなくてはならない。しかし、今のままでは妃となる娘一人すら支えることは出来ないでしょうね……」

私の言葉に国王はにやりと笑った。

「ふ。わかっておったか。この国の王子はまだまだだが、お前のような宰相がいるのなら安心か？」

「いいえ。滅相もございません。私などまだまだでございます。．．．  
．．．あなた様のような宰相にはなれません」

「ほう、知っておったか？」

笑みが消え、鋭い目つきでこちらを睨んできた。

「もちろんです。国王の甥という事を世間には隠しながらご自分のお力のみで宰相にまで上り詰めたノーダン様はあなた様の事ですよ  
ね？」

「．．．そうだ。前国王ですら知らなかった事だがな。よく私だと気付いたものだ。前国王が殺された後、次期国王はまだおさなく国を治められなかった。そこで第2位継承権のある私が次期国王が成人するまでの間、国王となる事となった」

睨んでいた視線がふっと和らぎまたもやにやりと笑った。

「．．．まさかとは思いましたが。しかし、あなた様が国王になられたのでしたら、隣国は安泰ですね」

「そうでもない。今まで前国王の甘い汁を吸っていた奴らの掃除は大変だ。その為にもローズにも働いてもらいたい」

「．．．私は構いませんが、ローズが何と申すでしょう？」

あのローズの事だ。兄の事で迷惑をかけた国にのこのこついていくとは思えない。

「まあ、そこは心配ない。先程、話はした。多少強引だったがローズも承諾した」

「ほお。ローズが承諾しましたか。でしたら、私は構いません。どうぞ、煮るなり焼くなりお好きになさってください。……ただし」

私はそこで深呼吸をし、国王に鋭い視線を投げかけた。

「……必ずローズは返していただきます」

「ほう、私の妃にはさせないという事か？」

「ご冗談でしょう？あなた様が本気でローズを欲しているとは思えません」

国王はじろりと私を睨んだかと思うと、腹を抱えて笑いだした。

「ははは！！そうか、お前にはそう見えるか。……しかし、本気ではないにしろローズという人物は面白い。興味はあるぞ？」

私は、ため息をついた。

「……興味うんぬんで、ローズをたぶらかすのはおやめ下さい。アレはあれでも妃となるもの。我が主に返していただきます」

「ふん。つまらん。……まあ、いいだろう。期間は1年だ。その

間にお前の主をしつかりと教育しておくんだな。その時がきたらち  
やんと返してやるさ」

「……お任せ下さい」

私の意志を確認すると、国王は部屋を後にしたのだった。

番外編 宰相様と国王様（後書き）

ローズが旅だつ前に宰相と国王で交わされた会話です。

実はもともと国王はローズをローズを返すつもりだったんですね！

## 番外編 出会い

「ローズ……」

彼女が城へ上がってきたのはいつだったろう。

「そうか。あれはローズがまだ10歳の時だったな」

窓辺に一人佇めば頬を通り過ぎる風が心地よかった。

「お初にお目にかかります。私、ローズと申します。この度、宰相様の補佐官を務めさせていただきます」

ぺこりと頭を下げる彼女を見た時、俺はこんな子供が宰相の補佐官だという事実を目を丸くした。

「殿下。彼女はこう見えても頭脳は我々に負けず劣らず頭が働きます。そして、この子の兄は間者としての仕事を任せます」

宰相の一言で俺は全てを悟った。

昔から、我が王家に使える一家がいた。

彼女たち一家は、優れた頭脳を持ち、影ながら我が王家を支えてくれた。

しかし、不幸な事故により彼女たちの両親は彼女が幼いころに亡くなっていた。



「……そうか。宜しく頼む」

そう言って、ぽんつと頭を手をおけば、嬉しそうに笑っていた。

「はい！よろしくおねがいます！！」

その顔に思わず俺も笑顔になったものだった。

「……あの頃は可愛い妹が出来たみたいで嬉しかったな」

それなのに、いつからローズに恋をしてしまったのだろう。

「殿下。この書類はこちらに置いておきますので、後で必ず目を通しておいってくださいね！」

宰相補佐官となってからしっかりと働くローズに俺もそれに答えるよう頑張っていた。

「うむ。わかった。・・・ローズ、お前は少し休めよ？じゃないと体を壊してしまう」

その頃はすっかり兄責気分でローズに注意していたものだ。

「はい。ありがとうございます！でも、私しっかりと働きたいんです！この国がよりいい国になるように！」

目をキラキラさせながらそう語っていた。

「ああ・・・。あの頃から国を想う気持ちに変わりはなかったな」

ローズの言葉を思い出すとおもわずクスリと笑ってしまう。

「ただ、いつだったろう？」

夜、彼女の家に強盗が押し入ったと連絡を受けた。

その時、彼女の兄には別の仕事を頼んでいてローズ一人だった。

「宰相！ローズは無事か！！」

宰相に抱えられながら城に保護されてきたローズに慌てて近寄るとローズはまるで魂をどこかに置いてきたかのように目がうつろにな

り固まっていた。

「ま、まさか!！」

俺の言葉に宰相は首を振った。

そして、抱えていたローズを椅子に座らせるとローズと少し距離を取り話した。

「いえ。ローズは何もされておりません。ただ……刃物を突き付けられ脅されたようです」

ローズの耳に入らない様にこっそりと俺に耳打ちをすれば宰相は申し訳なさそうに頭を下げる。

「……私が城にとどまるようもっと強く言っていれば……」

悔しそうにそういう宰相の言葉に俺はひどい言葉をぶつけてしまった。

「そうだ!なぜ一人家に帰した!しかも、ローズが一人の時は城で預かるようにあれだけ言っていただろう!！」

怒鳴る俺の声に、ローズが肩をピクリと震わせた。

「い……いやあ……いやあああああ!!!!!」

突然のローズの叫びに思わず俺はそちらを振り返る。すると、傍に寄ってきた医者に声をかけられる。

「で、殿下。申し訳ありませんが、声を落として下さい。彼女の恐

怖心を煽ってしまいます！」

その言葉を聞いて俺は情けなくなった。

彼女が怖い思いをしていたのになぜすぐそばに駆けつけてやらないのかと。

そう思うと足が勝手にローズの元へと向かっていた。

「ローズ」

そつと傍によつてもローズの目は何も写さない。

10歳の子供にこんなにも心に傷を負わせた犯人が許せなくなる。

「……ローズ？」

そつと手に触れると、ピクリと再び肩が揺れる。

「ローズ。もう大丈夫。大丈夫だよ？俺を見て？ローズ」

椅子に座らされているローズの目線に合わせるように膝を着くと下からローズを見上げる。

俺の声に徐々に瞳が明るくなってきた。

「ローズ？怖い思いしたね？傍にいてあげられなくてごめんね？」

「………で………でんか？」

俺の言葉に答えてくれたローズに俺は返事をした。

「うん。ローズ大丈夫だよ。これからは俺がずっと傍にいてあげるから。もう一人になんてしないよ？」

そう言っ頭を撫でそつと抱きしめてやると、ローズの瞳から涙があふれ出た。

そしてこの時、俺は彼女を守ってやらなければと心に決めた。

それから何日かして、ローズは元気を取り戻した。

それでも、着替えを取りに帰ったりするときなど、どうしても一人で家に帰らなければいけないときに、一人で家に帰る事は出来なくなっていたので俺が何度も一緒に家へと帰ってやった。

宰相や重臣たちにはかなり止められたのだが……。

「ローズ？俺が傍にいて嫌だったらすぐに言ってね？」

俺はふとそう思っ事があった。

そんな俺の言葉にローズは首をかしげると笑った。

「なんで？嫌になんてならないよ！だって、ずっと傍にいてくれるんでしょ？」

その言葉に俺の心は満たされた。

それから、何があっても彼女を離したり出来ないと思った。

「……あの頃のローズは可愛かつたな」

ふと、そう呟けば後ろから声が聞こえた。

「あの頃っていつよ！今は可愛くないって言う事？」

いつの間に後ろに立っていたんだろう？

怒ったように腰に手を当ててたっローズに思わず笑みがこぼれる。

「そんなわけないだろう？やっと手に入れたんだ。あの頃よりも今のローズの方がもっともーっと可愛いに決まってる」

そう言って肩を抱き寄せれば頬を染める。

やっと俺の手元に戻ってきた彼女に俺は再び2度と傍を離れない事を誓った。

「……愛しているよ、ローズ」

そう囁くと、驚いたような顔をしてにっこり笑った。

「私も、愛しています。リルガ殿下」

## 番外編 出会い（後書き）

さて、ここまで読んで下さった皆様！

本当に長い間お付き合いありがとうございました。

ここで『ローズの恋愛』は一旦完結とさせていただきます！

もしかしたら、ゆるゆると番外編をUPさせて行くかもしれません  
が、その時にはまた目を通して頂けると幸いです。

稚拙な文章でもとても読みにくかったでしょうが、長い間ご愛顧頂き  
誠にありがとうございました。

睦月

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2522u/>

---

ローズの恋愛

2011年10月12日11時56分発行